
ヒベルニアの極光

葉梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒベルニアの極光

【Nコード】

N4345Y

【作者名】

葉梨

【あらすじ】

ヨーロッパ全域を襲った大地震を境に、世界の空は分厚い雲に覆われ続けていた。ある日、西の果ての島から流れ着いた一人の少女が言う。「ヒベルニアにだけは太陽が照っている」と。異常気象の秘密を探るためにヒベルニアを目指したのは、家族を失った異能の少年、ヒベルニアの秘密を知るエディンバラ名誉司教、好奇心に負け続ける民話学者、冒険小説好きの書籍商。18世紀のアイランドとスコットランドを舞台に、彼らの旅が始まる。

プロローグ（前書き）

災害によって心や体を傷つけられたすべての方に、この作品を捧げます。

プロローグ

夜明けが来ても 西を向いていればまだ夜だ
朝が来ても 目を閉じていれば真夜中だ

もし 太陽が昇らなかつたら
東へ向かって走ればいい
僕と 世界の夜明けを見に行こう

夜の向こうには朝が
暗闇の向こうには光が
混沌の先には希望が
必ず僕らを待っている

(オペラ『ラヴェル』より「夜明け」)

しかし、マキシムの弟は言いました。

「だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか」

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に異を唱えたのは、彼にとって初めてのことでした。

「まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきつとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか」

マキシムの妻は別れを惜しんで涙を流しました。

「きつとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム」

「ああ、約束する」

「約束だ」

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。しかし、約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています。

（ヨイク・アールト著 『クラシックの歴史』（リプトン書店、1767年）より 一部抜粋）

そのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。猫のようにしなやかな人影が修道院の庭に音もなく着地する。ま

るで漆黒の闇夜に現れた伝説の盗賊のようだった。修道院の塀の高さは二メートル以上あり、その上、塀の外をぐるりと掘が囲んでいる。そんな芸当を難なくやってのけるのはこの町でも彼くらいだろう。

「いい匂い」

形の良い両眉を上げ、彼は鼻腔を膨らませた。ついでに両腕を広げて月も星も見えない天を仰ぎ、その場でぐるぐると回る。しばらく子供じみた遊びに興じていると、彼の短い茶色の髪が、しつとりと甘い夜霧に濡れた。この修道院はその名の通り、ウイスキーを蒸留している。

魅惑的な香りに酔いしれてはいるが、彼は酒に深く酔う性質ではない。彼の酒の強さは大酒飲みの多いこのアイルランドでも抜きん出っていて、今夜も行きつけのパブの閉店時間までビールを飲んでいった。酔いの回った客に酒を薄めて出す店主も、彼だけはまだ騙せずにいるというもっぱらの噂である。ちなみに飲酒に年齢制限はなく、紳士としての振る舞いさえできれば、誰もが好きなだけ酒を飲むことができる。その代り、泥酔など絶対にしてはいけない。

朝から建設現場で働き、夕方には行きつけのパブでギネスビールを飲み、夜が更ければ歌を歌い楽器を鳴らし、深夜になって町はずれの修道院へ帰って来るというのが彼の日課だった。門限に間に合わず、塀を乗り越えて修道院内のねぐらに戻るのもいつものことだ。昼間はウイスキー造りやレース網みや農作業に精を出すおせっかい焼きの修道女がうろろろしているこの庭も、深夜を過ぎた今ではしんと静まり返っている。建物から火の気は消えていて、どんなに耳をすましても物音の一つもない。

修道女たちの眠りを妨げることに彼はそつと草を踏んで庭を横切った。敷地内には修道女や病人が寝起きする居住棟と事務所、礼拝堂が建っていて、礼拝堂の裏には果樹園や畑が広がり、そこでは林檎や野菜や小麦をつくっている。彼は礼拝堂の横を通り過ぎ、木の葉や小枝を踏みしめて収穫の済んだ果樹園を抜ける。その先にある開けた草地へ近づくにつれ、彼の足取りは徐々に重くなっていた。

「ただいま、帰ったよ」

彼が足を止めた場所は墓地だった。本来は修道院内で亡くなった老人や病人を葬るための墓地だが、最も新しい墓標の一つには彼の妹の名が刻まれている。彼は草地に片膝をつき、冷たい石の墓標にそつと触れた。

「今日も三月地震で壊れた旧街道の石畳を直したよ。幹線道路や街の中心部の修繕が済んだから、やっと旧街道に手をつけられるようになったんだ」

今から九ヶ月前の一七六五年三月九日、未曾有の大地震がヨーロッパ全域を襲った。震源地は各地に散らばる断層や火山であったが、それらがほぼ同時に大地震を引き起こした原因は解明されておらず、地震とそれに続いて起こった津波や火事、大雨や洪水などの災害は総じて三月地震と呼ばれている。

大地震は町や道や港湾を壊し、津波や洪水は建物や家畜や農作物を押し流したが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。三月地震の発生から今日までの九ヶ月間、世界中の空が分厚い雲に覆われて一度も太陽の光が差さないのだ。最初は火山灰が上空を舞っているだけだろうと楽観的に考えていた者もいたが、しばらくするとそんな

ことを口にする者は誰もいなくなった。太陽の光が差さない、たったそれだけのことがどんなに恐ろしい未来を紡ぎだすのか、秋が訪れるまでもなく人々は悟っていた。人間が口にする農作物も、家畜の飼料も、魚介の餌となる微生物も、十分な日差しがなければ育たないのだ。

案の定、今秋の収穫は昨年の半分以上で、世界中が厳しい飢饉に見舞われている。彼の住むアイルランドも例外ではなく、ビールは値上がりするし、育ち盛りだというのに一日二回の食事はジャガイモ料理ばかりだ。

「三月地震は神が我々に与えた試練である。神のしもべとして祈りを絶やさず善行に励むことを欲する。災害の混乱に乗じて悪事を働けば決して神の国に行くことはできない。最後の審判を忘れることなかれ」

そのエディンバラ教皇の声明は日曜の礼拝で馴染みの司祭の口から耳にたこができるほど聞いた。それならオレはもう神の国には行けないな。彼は自嘲して墓標に触れていた手をだらりと垂らした。

とん。

遠くでかすかな音が聞こえた。少し前に彼がしたように、誰かが修道院の塀を乗り越え庭に着地したような音だ。彼は素早く立ち上がり、足音を忍ばせて来た道を戻った。果樹園の林檎の木の隙間からそつと様子をうかがうと、背の高い男の影がゆっくりと居住棟へ向かうのが見えた。

ウイスキー修道院はこの港町ベルファスト唯一の女子修道院である。老病人以外の男性の立ち入りは日の出から日没までと決められているので、こんな真夜中に男が訪ねて来るのはおかしいことだっ

た。見知らぬ訪問者は実にのんびりと、暢気にゆったり歩いている。応対に出るべきかと彼が林檎の木の影で思案していると、訪問者の男は思い立ったように急に方向転換して彼のいる果樹園に身体を向けた。

男は聖職者のようだった。暗闇に浮かび上がるほど白い肌と背中と結んだ金褐色の長い髪がとても上品で、地面に届きそうなほど丈の長い濃紺色の法衣をまとった身体はがっしりとしている。年の頃は壮年に見えた。長いまつげに縁取られた瞳は翡翠色で、腰に提げている数珠も同じ色をしていた。

相手が聖職者と分かると彼は林檎の木の影から出た。男も彼に気が付いたようで、ゆっくりとした動作で彼の方を見た。

「こんばんは」

男の口から聞こえたのは、音楽のような声だった。低く響く穏やかな声で暢気な挨拶をしながら、男は彼に向かって微笑んだ。だが、その微笑みが一瞬のうちに固まったのを彼は見逃さなかった。男は彼の顔を穴があくほどじっと見つめたり、芝居じみた仕草で自分の目をこすったりしている。

「こんばんは。……あの、何か？」

居心地の悪い思いで彼が問うと、男は我に返ったように居住まいを正したが、すぐに愛好を崩して再び親しげに彼を見つめた。それはうっとりとして、愛おしみ慈しむような瞳だった。はつきり言って気持ちが悪い。男が聖職者だと知って安心していた気持ちが消え、彼の心に警戒心が生まれた。だが同時に何かもつと根の深い感情が、彼の心の隅っこでわずかに疼いた。それが何なのかは今の彼には分

からない。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。君はシスター・アンジェラの曾孫のゴルガー・バルトロメかな？」

1・ウイスキー修道院

そのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。今夜二人目だ。

広大な緑の敷地は高い塀と深い堀で囲まれている。ギーヴ・バルトロメはその内側の芝生に、木の葉のように着地した。このウイスキー修道院を訪れるのは六十年ぶりだった。

「うわあ、やっぱり相変わらずだあ」

ふわふわと夜霧とともに漂うアルコールの香りに、ギーヴは顔をしかめた。ウイスキーを蒸留しているこの女子修道院は昼でも夜でも一日中、酒の匂いがぶんぶんするのだ。酒好きにはたまらないだろうが、ろくに酒が飲めないギーヴにとっては騒音と同じか、それ以上の迷惑である。

つい何日か前にすっかり飲んでしまったフルーツビールで泥酔したことを思い出し、ギーヴは頭を振った。口で息をしながら、「よしよ」と言っておもむろに歩き出す。本人は急いでいるつもりだったが、はたから見れば暢気に散歩しているとは思えない足取りだった。

「この匂いだけで酔いそう。エディンバラより酷いよ」

彼の暮らすスコットランドのエディンバラの悪臭は国際的にも有名で、「エディンバラは一マイル先からも匂う」と言われるほどだ。パリ同様、家庭の窓から汚物を投げ捨てるので、街はいつでも悪臭が立ち込めている。

ウイスキー修道院の庭はまるで林のようだった。両腕をいっぱい
に広げたようなナラの木が乱立していて、闇よりも濃い直線的なシ
ルエットを天に向かっていくつも作り出していた。その根元にはや
せたドングリがごろごろと落ちていて、白い花が黄緑色の冬草に紛
れるように点々と咲き、軽く跨いだ小川には薄氷が張っていた。

ギーヴが風を切って庭を横切ると、身にまとった濃紺の法衣のひ
だが扇のように広がり、月明かりも差さない漆黒の闇にとろけた。
地面についた錫杖の輪がりんと澄んだ音を奏でる。ギーヴの目に礼
拝堂の裏に広がる果樹園が映ったのはその時だった。六十年前にこ
こを訪れた時もギーヴは果樹園に足を踏み入れている。天気の良い
秋の昼下がり、修道女たちが林檎の木陰で食後のお茶を飲みながら
笑いさざめいていた光景を思い出し、ギーヴはちよつと寄り道をし
てみようという気になった。

くるりと方向転換して果樹園に向かうと、六十年前の記憶がまざ
まざと蘇り、ギーヴは少々ばつの悪い気持ちになる。前回、ギーヴ
がここを訪れたのは彼の兄嫁を家出から連れ戻すためだった。ギー
ヴはその兄嫁に横恋慕していたが、もちろん彼女を兄から奪い取る
うとか、兄に内緒で彼女と関係を持つなどとは一度も考えたこと
はなく、彼女への想いや不埒な劣情は胸の奥に鍵をかけてしまい込
み、誰にも打ち明けなかった。だが。

「迎えに来てくれて嬉しかったわ」

彼女にそう言われた時、ギーヴはひた隠していた想いを彼女に告
げてしまった。彼女はさぞ困っただろう。優しい彼女はギーヴを傷
つけないように気遣いながら、きっぱりと彼を拒んだ。ギーヴは悲
しかったが、同時にひどくほっとしたのを覚えている。

果樹園は六十年前より大きく広がっていた。確か何十年か前にもらった手紙に、オンフルール村の林檎の苗を何本か移植したと書いてあった気がする。フランスのギーヴの故郷からやってきた林檎の木がアイルランドですくすくと育ち、人々に美味しい実をふるまっている。感慨深く心を弾ませた時、果樹園の中から小柄な人影が颯爽と現れた。修道女だろうか。

「こんばんは」

こんな夜更けに出歩くとは奔放なシスターだと笑いながら近づくと、夜の闇の中で、その人の顔はどうしてかずいぶんよく見えた。

それはギーヴがかつて恋慕っていた女性の顔だった。

「あのー……何か？」

不審者を見るような目で見つめられ、ギーヴは我に返った。よく見ると、目の前の人物は少年だ。年は十代半ばくらいだろうか、中性的な顔立ちは幼く見えるが眼光は刃物のように鋭く、細身の体にオリーブグリーンの上着とズボンを身につけている。短い髪も瞳もアンジェラと同じ茶色だった。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。君はシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメかな？」

容姿と年齢から判断してギーヴはそう言った。確かアンジェラの曾孫の中で男の子は一人だけだったはずだ。彼の名前がコルガーといい、古代アイルランドの言葉で「荒武者」を意味するということ。はアンジェラが手紙で教えてくれた。

「確かにオレの名前はコルガー・バルトロメですが、シスター・アンジェラの曾孫ではありません。神の花嫁に子や孫はいませんかね。」
シスター・アンジェラに御用でしょうか？」

コルガー少年は一瞬だけ驚いたような表情を見せたが、すぐに涼しげな顔で大嘘をついた。外見は曾祖母似で、性格は曾祖父似なのかもしれない。マキシムにもそういうところがあった。やたらめつたら口が達者なのだ。

「隠さなくていいよ。俺はギーヴ・バルトロメ、つまり身内だ。アンジェラの曾孫はたしか男の子が一人に、女の子が三人くらいいるんだっけ」

「……妹は二人ですよ。二人とも死んだけど」

コルガーは数秒間の思案の後、低い声で真実を明かした。聡明な子だ。

「緊急のご要件ならお取次しますが、そうでなければ明日改めてお越しく下さい。ここは日没以降、男子禁制ですから」

「前に来た時は快く泊めてくれたよ。それに、君も男子じゃない」「オレはいいんです」

よく分からない。一刻を争うわけではないものの、こんな時間にやってきて緊急じゃないと言ったらそれはそれで怒られそうだったので、ギーヴは取り次ぎを頼むことにした。

「取り次いでくれないかな？この時間じゃあどこの宿も開いてないし、どちらかというと急ぎの用件だから」

「シスター・アンジェラは最近寝つきが悪いようなので、できれば

起こしたくないんですけど、それでも取り次げとおっしゃいますか？それともシスター・アンジェラが起きるまでお待ちいただけますか？」

朝まで待てと言われている気がする。気を遣えと。

「分かったよ。アンジェラが起きるまで待たせていただきます」

ギーヴは降参した。どうやらアンジェラは曾孫にとっても愛されているようだ。そう思うと、少年の手厳しい対応も悪い気がしない。むしろ、彼の強引で計算高いところが兄マキシムを思い出させて嬉しくもあった。

「ようこそ、お茶を淹れますね」

コルガーはそれまでの慇懃無礼が嘘だったように破顔した。その底抜けに朗らかな花のような笑顔を見て、ギーヴもつい笑ってしまった。どんなに泣いても怒っても、あつという間に端から忘れていくのが典型的アイルランド人だと聞く。アンジェラの容姿を引き継ぎ、マキシムの性格を受け継ぎ、アイルランド人の気質を持つ、これが兄の曾孫か。

コルガーが先に立って修道院の事務所へ向かって歩き出し、ギーヴは彼の小さな背中をのんびりと追った。コルガーは楽器ケースを背負い、小脇にスケッチブックを抱えている。黄緑色の芝の上を歩く足取りは弾むように軽く、その下で踏みつぶされたドングリがばきばきと楽しみに歌う。

「ねえ、背中 of 楽器は何？」

訊ねると、コルガーはわずかにギーヴを振り向いた。アンジェラに良く似た茶色の目がくると動く。さっきまでの鋭さは消え、小動物のように可愛らしい。ギーヴの心にはすでに血縁者に対して抱く親愛の情が芽生えていた。

「フィドルですよ」

コルガーは意味ありげに唇の端を上げた。

「フィドル？」

聞いたことのない名前の楽器だった。ギーヴが首をかしげていると、少年はおかしそうに目を細めながら脚を止めて楽器ケースを背中から下し、蓋を開けて中身を見せてくれた。それは紛れもなくバイオリンだった。

「アイルランドではフィドルって言ってます」

「へえ、君は演奏家なの？」

「演奏家？まさか！パプで弾くんですよ。みんなで色々な楽器を持ち寄って合奏するんです」
セッション

ギーヴが暮らしているスコットランドにもパプの文化があるが、アイルランドのそれはまた独特だと言う。下戸のギーヴには無縁の世界だ。

「あの、あなたはシスター・アンジェラとどういったご関係で？」

フィドルを背負い直しながらコルガーはギーヴを遠慮がちに見上げた。頭二つくらいの身長差のある少年がようやく自分のことを訊ねてくれたのでギーヴは気分良く答えた。相手の反応がおおよそ見

えているだけに躊躇いはなく、むしろ面白がっている節もある。

「俺はマキシム・バルトロメの双子の弟だよ。アンジェラにとっては夫の弟、君にとっては…… 大大叔父さんかな。実は俺、こう見えて百九歳」

疑わしげな顔をするか、大嘘をつくかと怒りだすか、馬鹿にするかと鼻で笑うか、この子供はどんな反応を示すだろう。ギーヴはひねくれた思いでコルガーの表情をうかがった。ところが、少年は感心したような顔でギーヴをちらりと見たきりで、再び事務所に向かつて歩き出した。

「へえ、大大叔父さんかあ」

拍子抜けして彼に続くのが遅れたギーヴは慌ててコルガーを追いかけた。慌ててと言っても全く速くない。

「あの、君、それ信じるの？」

「え、嘘なんですか？」

コルガーは振り返りもしない。

「いや、嘘じゃないけど、本当に本当だけど。こんなに簡単に信じてもらうの初めてだから、どうしてかなあと思って」

どう見ても三十歳前後の容姿のギーヴが十七世紀の生まれで、こともあるうに百歳を超えていると聞いて驚かない者はあまりいない。驚かないとしたら、鼻から信じていないか聞き間違えたと思っているかのどちらかだ。しかしコルガーはそのどちらでもないようだった。

「それはもう」

低く切り出し、コルガーは脚を止めてギーヴに向き直った。小動物のようだった彼の目が再び刃物のような鋭さで光る。この子供が抱えている何か暗く重たいものの正体がギーヴにも垣間見えたような気がした。

「それはもう、他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえると思うから」

眉を下げ、苦々しく微笑んだ少年はアンジェラにもマキシムにも似ていなかった。

「ああ、それは」

ギーヴも苦い思いで応じる。自分の心の歪みを感じるのはこんな時だ。ギーヴの思いを感じ取ってくれたのか、コルガーはいくらか親しみをこめて彼を見つめ返してくれた。ギーヴは片頬を上げて微笑む。

「 同感だね」

築百年以上の修道院は白い漆喰塗の壁に赤黒い瓦屋根が乗っている二階建てだ。コルガーはギーヴを事務所の中の小さな応接室に通し、熱い紅茶を淹れてくれた。石造りの応接室には堅い木の机と揃いの椅子が四つあり、その足元には古い絨毯が敷かれている。

壁に飾られた一枚の絵にはこのウィスキー修道院が描かれていた。強い日差しの注ぐ緑いっぱいの庭で、青空と白壁の居住棟と果樹園

を背に、修道女たちが笑いさざめいている。それはギーヴの記憶の中のウイスキー修道院のイメージとぴったり重なった。

「それ、オレが描いたんですよ」

食い入るように壁の絵を見つめていたギーヴの背後で、コルガーは照れ臭そうに言った。

「そうなの？君は楽器が弾けて、絵も描けるんだ」

振り向いたギーヴはコルガーの姿を見て目を見張った。コルガーは二人掛けの布張りのソファを片手で軽々と担ぎ上げている。

「あ、これ、眠くなったら軽く休めるようにと思って」

どすん、と音を立てて少年は暖炉の前にソファを下す。ギーヴはコルガーの言葉を思い出してなるほどと思った。「他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえる」と彼は悲しそうに言ったのだ。

「みんな五時には起きてきますから、それまでゆっくりしてて下さい」

コルガーはアンジェラが起きて来るまでソファで横になったらどうかとギーヴに勧めたが、ギーヴはそれを辞退した。時刻は二時過ぎだ、あと三時間もすれば居住棟で眠っている修道女たちは起床する。

「ねえ、それ見せてよ」

赤々と燃える暖炉の炎の前のソファに座り、ギーヴが指差したのはコルガーが脇に抱えるスケッチブックだった。コルガーは頬を染めてわずかに渋ったが、結局はそれをギーヴに差し出した。

スケッチブックにはベルファストの古い大聖堂や教会や市庁舎が描かれていた。建物の外観、内部の全体図、柱飾り、扉の彫刻、屋根の上の魔物の像、天井の造詣……色々な角度から執拗なまでに描かれたスケッチは、少年の入れ込みようをうかがわせるには十分だった。

「やっぱり。タッチがマキシムによく似てる」

スケッチブックをめくりながらギーヴはのんびりと言った。胸に懐かしい気持ち広がりが、暖炉の炎で温まり始めた身体と心が眠気に誘われる。兄も絵を描く人だった。彼はギーヴにはない才能を他にも多く持ち合わせていた。

「君は建築が好きなんだねえ」

ギーヴがソファの背によりかかり、背後に立つコルガーを顧みると、彼は暖炉の炎に照らされたギーヴの姿を頭からつま先までゆっくりと見下した。ギーヴは僧侶が着用する黒の詰襟の上に丈の長い濃紺の法衣をはおり、自分の背丈ほどの長さの錫杖を脇に抱えている。

「失礼ですけど、濃紺の法衣を着る方がエディンバラ教会にいますという話は聞いたことがあります。エディンバラ教皇は純白、枢機卿は朱色、司教は紫、司祭は灰色の法衣をまとうものでしょう？あなたはエディンバラ教会の方ではないのですか？」

ギーヴの身元を見極めようとする少年の問いは鋭かったが、彼の声や表情からは何故だか警戒心は感じられなかった。ギーヴはどこまで本当のことを話そうかと頭をかきながら、自分の隣に座るようコルガーを促した。

「さすが修道女の曾孫だ、よく知ってるね。そうだよ、俺はエディンバラ教会のヒエラルキーからはずれているんだ」
「ヒエラルキーからはずれてる？」

コルガーはギーヴの隣に腰を下して首をかしげた。

「俺は六十年間エディンバラ教会に囚われていた、名ばかりの司教なんだ。実は閉じ込められていた塔から脱走して来たお尋ね者なのだ」

2・冒険のはじまり

ギーヴがウイスキー修道院を訪れる二日前、十二月一日のことだ。

ギーヴは窓を開けた。分厚い木の窓は勢い良く開いて、塔の中に重く溜まっていた空氣がみるみる外へ吸い出されてゆく。彼は胸一杯に息を吸い込み、大きく伸びをした。この塔に幽閉されて六十年、飽き飽きするほど眺めたエディンバラの街は今日も変わらず美しい。薄らと朱色を帯びた夕暮れの光に照らされた赤いレンガ屋根群は、まるでルビーのように輝いていた。

「案外あっさり帰って来るかもだけど、行ってくるよ」

窓に背を向け、ギーヴは多少の感慨を込めて自室を眺めまわした。可愛らしい小さな木の丸テーブル、テーブルと揃いの椅子二脚、天蓋つきの寝台、火の消えた暖炉、礼拝台、木のついたて。それがこの塔に閉じ込められた彼に与えられた全ての家具だった。

囚人のように扱われ、惨めな気持ちにならないわけではなかったが、もし自分が普通の人間に生まれていたら、今頃もっと苦しい生活をしていたに違いないと思う。雨風をしのぐ屋根のある場所で寝起きできるだけでした。ギーヴには自分の不遇に酔いしれる趣味はなかった。たとえ学者でありながら一冊の本を持たなくとも、エディンバラ大学図書館への出入りが許されているならそれで充分だった。

彼を捕えているのはヨーロッパのほぼ全域に教えを広めるエディンバラ教会である。もっともらしく「エディンバラ名誉司教」などという位を授かったが、組織内での権限はほとんどなく、エディン

バラ城の建つ岩山にそびえる聖ピーター大聖堂に隣接する塔のひとつに軟禁されている。彼はエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒なのだ。

クラシック教徒は六十年前にエディンバラ教会から破門され、改宗しなかった者たちは処刑された。それを免れた者はヨーロッパ中に潜んでいるとも、誰も知らない遠い島に移り住んだとも言われている。彼らが反乱を起こさぬように捕らえた人質、それがギーヴだ。クラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの双子の弟である。

ギーヴは窓の外を眺め、小声で歌を口ずさんだ。

「過ぎた日々はただ懐かしく
振り返ることしかできないけれど
ただ心だけで この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

子供の頃、マキシムとギーヴは故郷の聖歌隊で『神の歌声を持つ双子の神童』ともてはやされていた。

「愛を告げる勇気も 己の非を認める強さも
運命に立ち向かう覚悟もなかった
あなたが許してくれるなら
他にはもう何もいらない」

ギーヴの実年齢は百九歳だが、外見は壮年に見える。背中で緩く結んだ腰まで届く長い髪はつややかな金褐色で、身長は十八世紀のヨーロッパ成人男性の中でも長身の部類だ。長いまつげに縁取られた瞳は、祈りの回数を数えるために腰に提げている翡翠の数珠と同

じ色をしている。黙って立っていれば若い女性にもてないこともないが、一度口を開いてしまうと「年寄りみたい」と言動に非難を浴びることが多い。十七世紀のフランス北部の漁村に生まれ、クラシック教徒が異端とされる前から生きているのだから仕方がないといえ仕方がないのだが。

「どうも、菓子店ニユートンです！」

塔の地階から若い娘の元気な声がした。

「ギーヴ猊下にアップルパイをお持ちしました！」

合図だ。いよいよ始まった。

ギーヴは石の壁に立てかけてあった一本の錫杖を手に取り、別の手で自分の頭より小さな布包みを持った。荷物はそれだけだ。

「きゃあ！」

くぐもったような爆発音がして、娘が叫び声をあげた。

「何だ、何事だ！！」

「地下だ！地下道で何かあったんじゃないか？！」

複数の衛兵たちが大騒ぎを始め、それを聞きつけて大聖堂前の広場を見張っていた衛兵たちも持ち場を離れた。予定通りだ。

「さて、行こうか」

出かける覚悟を決め、六十年間も雨風から自分を守ってくれた小さな部屋に背を向けたとき、ギーヴの足の下で鐘が鳴った。この塔

は鐘楼なのだ。鐘は毎日、日の出から日没まで十五分ごとに鳴り響く。

西の空が燃えるように赤い。この鐘はこの日最後の鐘だろう。ギーヴは目を閉じて鐘の音に聞き入った。耳に慣れた儼かな旋律を、しばらく聞くことはないのだと思いながら。

鐘はまだ鳴っていたが、ギーヴは窓枠に手をかけてそこへ上った。狭い窓枠の上に立ち、思い切って外に身を乗り出すと、夕暮れの美しいエディンバラの町並みが遠くまで見渡せた。地面は遠く、人が豆粒のようだ。

新鮮な風が吹き、長い髪や足首まで覆っていた濃紺の法衣が扇のように広がる。ギーヴは思わず声を立てて笑った。六十年間感じたことがないくらい清々しい気分だった。

鐘がやんだ。ギーヴは大きく息を吸い込み、両眼を見開いて、力いっぱい窓枠を蹴って窓の外に飛び出した。年甲斐もなく、わくわくした。

まだ、諦めるのは早いんじゃないか？マキシム。

法衣をはためかせて落下し、ふわりと石畳へ着地した彼の姿を見た者はいない。ギーヴは身をかがめて広場を抜け、階段を下りて待ち合わせ場所へ急いだ。このエディンバラから逃げ出すために。

エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメが病に伏したという噂がエディンバラ教会内で囁かれ始めたのは翌日だった。彼がクラシック教徒の人質であり、本当は脱走したのだということを知る者は少ない。

これが冒険の始まりであった。

「その後、脱走を手伝ってくれた子たちと別れて、船に乗ってアイランドまでやって来たんだ。ここまでは郵便馬車に乗せてもらったんだよ」

ギーヴはバンゴールというアイランドの小さな港町で船を下りた。教会の放った追手の裏をかこうと思つてのことだ。ギーヴが姿を消せば、教会が真つ先に調べるのはベルファストのアンジェラの元のはずだ。港で待ち伏せでもされていたらたまらないと思い、彼は陸路でベルファストへやってきた。案の定、市門では厳しい検問を行つていたので夜を待ち、高い市壁を飛び越えて町に入り、やつとのことでウイスキー修道院まで辿り着いた。万事不器用な自分としては大変首尾よくできたものだと思つてギーヴは我ながら思う。

「クラシック教徒の人質？教会から逃げて来た？」

コルガー少年は困つたような顔で腕組みした。

「あなたはクラシック教徒なんですか？」

「うん。六十年前にエディンバラ教会から破門されて、そのまま教会に捕えられたんだ。ヨーロッパ中に潜んだクラシック教徒が反乱を起こさぬように」

あつさりと答えるギーヴに少年はますます困つたような顔をした。

「なぜ、ここへ？」

コルガーの質問には答えず、ギーヴは唇の端を上げた。

「君はアンジェラの曾孫で、しかもここに住んでいるんだよね。それなら、この修道院の秘密を知らないはずはないと思うんだけど」

少年が何か言おうとした時、窓の外が光った。まるで雷でも落ちたかのように一瞬だけ庭が明るくなったのだ。二人は窓に駆け寄り、外の様子を窺った。よく見ると、礼拝堂に明かりが灯っているようだった。

「こんな時間に誰だろう」

「眠れずにベッドを抜け出した誰かがお祈りをしているだけだといけれど」

修道院は日没と同時に唯一の門を閉ざして堀に架かる跳ね橋を上げる。夜更けに庭を散歩しても危険はないはずだが、コルガーの表情は厳しい。ギーヴの胸にも言いようのない不安がよぎった。心に何かが引つ掛かっている。

「オレ、様子を見てきます。あなたはここにいて下さい」

「待って、俺も行く」

ギーヴは暖炉の薪に灰をかけ、慌てて部屋を出て行くコルガーを追いかけた。嫌な予感を抱えながら二人は炊事場や食堂を抜け、門の外れていた扉を開いて外へ出た。そのとき、ウイスキーの香りに混じって妙な匂いがした。

「魔の匂いがする」

ギーヴは背中の毛が逆立つのを感じた。コルガーもうなずいた。

「行かなきゃ」

礼拝堂に向かって走り出したコルガーの背中をギーヴは追う。辺りには奇妙な風が吹いていた。生命の気配が大いに混じった、それでいてひどく冷たい風だ。見上げると、重々しい曇天が彼らの頭上へのしかかっていた。風に吹かれ雲は確実に流れているが、それが途切れることはこの九ヶ月間で一日もなかった。

「中に何者がいるか、分かりますか？」

コルガーは礼拝堂の前で足を止め、静かにギーヴを顧みた。修道院に隣接した礼拝堂は一見すると白い石造りの二階建てだ。だが本当はレンガで造った後に石を貼り、石造に見せかけている。どこの修道会にも所属せず、修道院長も置かず、資産家の後ろ盾もないので、石で礼拝堂を建てる金などないのだ。三月地震の時に崩れなかったのは奇跡としか言いようがない。

「アンジェラと、少なくとも一人、魔法を使う者がいるね」

ギーヴは声を潜めて答え、少年と視線を交えた。

「ちなみに、こういうことに対処する自信はありますか？」

訊ねつつ、コルガーは両開きの扉の片方を押した。

「全然ないねえ。長生きだけはしてるんだけど、俺は箱入りだからね」

悪びれもせずに答え、ギーヴはもう片方の扉に手をつく。二人の手で力いっぱい押し開けられた扉はバンと音を立てて壁にぶつかっ

た。装飾のない壁と天井を持つ小さな礼拝堂の床にさつと光が差し込み、風が壁のろうそくの火を消す。入口から祭壇まで太い通路が真っ直ぐに伸びていて、その両脇に木製の長椅子が合計二十個ほど並んでいる。

長椅子の群れの向こうに、二人を顧みる人影が二つ見えた。彼らは高窓から注ぐわずかな光に照らされていた。

「ばあちゃん！」

少年は人影に向かって呼びかけた。帰って来たのは期待通りの声だった。

「コルガーね？」

張りのある堂々とした声で応じたシスター・アンジェラは、前列の長椅子に座らされていた。その傍らにすっと立つ侵入者は、シルエットを見る限り女性だったが、着ているものは典型的な男性貴族の服だった。茶色の長い髪を丁寧に結びあげていて、化粧が濃く、胸が豊かだからすぐに女性と分かる。女であることを隠すというよりは機能性を求めている男装なのであろう。年齢は二十台前半くらいに見える。

「やあ、俺もいるよ」

「まあ、ギーヴげいか猥下！よかった、あなたが病に倒れたという噂はやつぱり嘘だったのね！」

おもむろに手を振るギーヴと、歓声を上げるアンジェラに、無視されたと思ったのだろう、男装の女が動いたのは間もなくだった。

ずがん！という鈍い音とともに、祭壇と扉を結ぶ通路に小さな穴が開いた。撃ち込まれたのは銃弾だ。コルガーはギーヴの腕をつかみ、とつさに長椅子の影に身を隠した。

「あらあらあら、誰かと思えば、ギーヴ・バルトロメ名誉司教猥下ではございませんか」

高窓からの薄光を浴び、男装の女は胸をそらして妖艶に笑った。

「君は誰だい。エディンバラ教会の人間には見えないけど」

ギーヴは長椅子の影から顔を出し、女に訊ねた。彼女は新しい銃を構え、それをアンジェラに向ける。ところが、そこで一瞬だけ、彼女は表情を曇らせた。アンジェラを見下ろし、寂しげな顔をしたのだ。

「ええ、その通り。私はアヤ・ソールズベリ。教会とは無関係よ。あなたやシスター・アンジェラに用があるの」

女は言いながらしげしげとギーヴを見つめた。

「本当なのね。三十歳の身体に百九歳のおじいさんが閉じ込められているという噂は。あなたのことを聖なる妖怪と言う人もいるのよ」

壮年の頃から姿が変わらないこと。それこそがマキシムとギーヴがかつてエディンバラ教会に認められた『神の奇跡』だった。二人は三十歳のある日を境に、髪や爪が全く伸びなくなった。擦り傷や切り傷を作っても瞬時に癒え、傷跡さえ残らなくなった。

「いつまでもこの世にとどまり、神のために尽くすよう、老いが止

まっただ」

当時の教皇はそう言って二人の名を福者の列に加えたが、ギーヴとマキシムだけは本当のことを知っていた。

「君はこんな夜更けに、物騒なものを持って、そんなおしゃべりをするために来たの？」

ギーヴは不愉快な気持ちを抑えて立ち上がった。無礼な女を恐れて椅子の影に隠れているのが我慢ならなかったからだ。彼の法衣の裾をコルガーが引っ張ったが構わない。

「ええ、そうよ。単刀直入に言うわ。シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

3・遠い日の約束

この年、一七六五年、世界から太陽が消えた。ヨーロッパ全域を襲った大地震の日からずっと、空が雲に覆われているのだ。なぜ太陽が雲に隠れているのかは分かっていない。作物の不作で食料の値段は跳ね上がり、人々の不満が各地で燦り始めている。各国の王たちは異常気象の原因を躍起になって探していた。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

彼女はきっぱりと言った。

「こう見えても、できればあなたたちに危害を加えたくないのよ。私はあなたたち二人が持っているヒベルニアに関する情報が欲しいだけ」

女王のような風格を持つ彼女は、アンジェラの後頭部に真っすぐ拳銃を向ける。彼女の名はアヤ・ソールズベリという。名門貴族の家系図に名を連ねる生粋のイングランド人で、現在は「ロッキンガム東方貿易会社」という企業に雇われている用心棒だ。

子爵家の令嬢であつた彼女が家を飛び出し、安穏な生活と貴族の身分を捨てたことには理由がある。アヤには幼馴染の親友がいた。彼の名前はジャック・ロッキンガムといい、ロッキンガム東方貿易会社の跡取り息子である。アヤの両親は「成金商家の馬鹿息子」と言つてジャックを敬遠したが、アヤにとって彼は唯一友達と呼べる存在だつた。

ロッキンガム東方貿易会社は、イングランド王国からの特別な委託事業を請け負う民間企業である。今から二十年ほど前、財政難で植民地を維持できなくなった王室が、その一部の統治を民間の資産家に開放したのだ。それに真つ先に飛びついたのがロッキンガム東方貿易会社の創始者ジョージ・ロッキンガムだった。王室御用達の商家とはいえ、それまで国内だけで収益を上げていたロッキンガム家はみるみる巨大化していき、今では植民地統治のための私的な軍隊まで保有している。

ロッキンガム家は、表向きはインド北部の領地から紅茶と小麦を運んでいる巨大貿易会社だ。安心で安全な品を扱う、誰もが知っている食料品店というクリーンなイメージも大衆に定着している。しかし、利益のためなら手段を選ばないことでジョージ・ロッキンガムの右に出るものはないということもまた業界では周知の事実だった。

「もっとと不作になればいいのにな」

九月のある夜のことだ。ジョージ・ロッキンガムは孫のジャックとアヤの前でそう言った。ロッキンガム家の居間でアヤがジャックに相談事をしているところへ、泥酔したジョージ・ロッキンガムがスコッチウイスキーの瓶を手にやって来たのだ。イングランド中から舞い込む縁談話に苛々していたアヤは彼の姿を目にとめて顔をほころばせた。彼女は子供のころから老人というものが好きだった。

ジョージ・ロッキンガムは高齢にもかかわらず、いまだに会社の舵取りをしている。その日も恰幅のいい体を高級なスリーピースで包み、四十年前は男前だったであろう顔を脂で光らせていた。頭髮は色こそ真白だが禿げてはおらず、とても六十代後半には見えな

い。

「どこもかしこももっともつと不作になれば、俺の領地の作物がもっともつと高く売れるのに」

目を丸くするアヤの隣で、ジャックは豪快に笑った。彼はアヤより五つ年上で、この夏に二十五歳になった。祖父の過激な発言にも慣れている。

「おいおい、じいさん。そうなりやインドの作物だって育たないだろ」

祖父の発言を丸きり冗談と受け取り、ジャックは軽い口調で言った。彼は長めの黒髪に黒い瞳の美丈夫で、ジョージ・ロッキンガムにあまり似ていない。趣味のいい赤茶のジャケットとパンツに乗馬用のブーツをはいている。彼が大腿で通りを歩けばリヴァプール中の女が振り返るとも、振り返った瞬間につまずいた彼に幻滅するとも言われている。彼の底なしのどんくさは王子様のような外見と同じくらい有名だ。

ジョージ・ロッキンガムは柔らかいソファにどすんと腰を下ろし、大きな腹を震わせて笑った。

「違うさ、ジャック。俺の領地にだけは太陽が輝くんだ」

「はあ？」

「エディンバラの友人が、いいことを教えてくれたんだよ。世界中が雲に覆われ、世界が不作に見舞われているにも関わらず、ある場所だけに太陽が輝いているんだと」

ジョージ・ロッキンガムは瓶に口をつけ、ウイスキーをごくりと

飲んだ。

「へーえ、そりやどこなんだ？」

老人が酒を飲み下すまで待つてから、ジャックは笑いながら訊ねた。本気にしていない。

「ヒベルニアだよ、ヒベルニア。ヒベルニア王マキシムが氣象を操つて、世界中の空を雲だらけにしているんだとよ」

ジョージ・ロッキンガムの声はしごく真面目だった。だからジャックもアヤも腹を抱えて笑った。

「あつはつは、じいさん、ヒベルニアはないだろ！俺たちだってもう子供じゃないんだから、御伽噺は卒業したぜ！」

「おじいさまったら、ご冗談がうまいんだから！」

だが、笑い転げる二人を見るジョージ・ロッキンガムは、やはり真面目な顔をしていた。

「まあ聞け。ヒベルニアへ行つてその氣象兵器を手に入れることができたら、世界の氣象を思うままに操ることができるってこつた。それは想像もできないくらい莫大な利益と途方もない軍事力を生む。イングランドを買うことだってできるかもしれない」

ジョージ・ロッキンガムが本気らしいことが分かると、アヤの胸の中で亡き祖母のことが思い出された。彼女の祖母は敬虔なクラシック教徒で、クラシックのリーダー・マキシム・バルトロメたちと共にエディンバラ教会と戦った人物だった。息を引き取るその時まで、彼女はヒベルニアのことを口にしていた。ヒベルニアには離れ

離れになってしまった大切な仲間がいると。もう一度彼らに会いたい、ヒベルニアの地を踏みたいと。

「おじいさま、ヒベルニアは本当に存在するんですね？」

笑いを収めてアヤが訊ねると、ジャックが大げさにソファに倒れこんだ。

「あー、もー、しょーがねえなあ、アヤまで何言い出すんだか。ヒベルニアやアトランティスは御伽噺の舞台だろ。俺級のヒーローでも行けねつつうの、おわっ！」

勢いあまってソファから転落した孫を無視して、ジョージ・ロッキンガムは身を乗り出した。

「ヒベルニアが本当に存在するかどうか、それは俺にも分からん。だが、もし本当にヒベルニアがあって、そこに気象兵器があって、他の会社に先を越されたらどうなる？他の国に先を越されたら？大変なことになる。我々は富を絞り取られ、飢えに苦しみ、そうなたら戦争が起こるかもしれん。しかも勝ち目はない。その最悪の事態を避けるには、ヒベルニアの有る無しも気象兵器の有る無しも、俺たちが真っ先に確かめればいい。正直、半信半疑ではあるが、俺はうちの用心棒たちを何人が選抜して、ヒベルニアを探す」

ジョージ・ロッキンガムはウイスキーの瓶に口をつけ、それを勢いよく傾けた。

その時、アヤの脳裏に懐かしい思い出が浮かんた。本当はもっと早く思い出さなければならなかった、心のどこかに引っかかっていた大切な記憶だ。

『ヒベルニアにはお砂糖の雪が降るのよ』

それは彼女が六歳の頃のことだ。舌足らずな口調でアヤは言った。生まれ育った屋敷の厨房で、お菓子の城を作っていた。かまどから漂う熱気が暖かったのを今でも鮮明に思い出せる。

『まあアヤお嬢様、そんなにお砂糖をかけられては。こちらのクリームになさいませ』

ブランデーの瓶を手にそう言ったのは祖母だった。瓶の中できらきらと揺れる茶色の液体は、お菓子作りには欠かせない。

『だめよ！ヒベルニアは誰も知らない西の果てにあつて、世界で一番美しいお城があつて、いろんなお花が咲いて、いろんな果物がなつて、それでお砂糖の雪が降るの。教えてくれたのは、ばあやですよ。それで、雪の下には黄金と宝石が、まるで石ころみたいにごろごろ転がってるのよね、ほら見て』

アヤが城の土台の中から小麦粉とクリームと砂糖にまみれた大量の貴金属類を取り出して見せると、祖母は卒倒しそうになった。

『お、お嬢様！奥様の宝石じゃありませんか！』

『いいのよ。あたしはいつかヒベルニアに行つて、こんなもの、いくらでも持つて帰るんだから！』

アヤはクリームだらけの両手を腰に当て、椅子の上に仁王立ちした。

『あたし、いつか絶対ヒベルニアを見つけるの！楽しみにしててね、

ばあや！』

祖母は目じりに涙をにじませて破顔した。

『まあ、アヤお嬢様ったら！』

忘れていた約束への想いが胸にあふれたとき、アヤの意識はロツキンガム邸に引き戻された。目の前には怪訝そうな顔をしたジョー・ロツキンガムと興味津津のジャック・ロツキンガムがいる。

「私、行くわ、ヒベルニアへ」

アヤの唇はひとりでに動いていた。アヤがヒベルニアを見つける
と誓った時に顔をくしゃくしゃにして喜んだ祖母の姿と、息を引き
取る時にアヤの手を握ってヒベルニアへの思いを口にした祖母の姿
が重なって、アヤの胸を締め付けた。

「行かなくちゃならなかったのよ。約束をしたから」

過去の残像を振り払い、アヤは居住いを正してソファに浅く座り
直した。ジョー・ロツキンガムの双眸を真つすぐに見つめる。酒
に酔ってはいたが、彼の眼は力強くアヤの視線を受け止めた。

「おじいさま、お願いです。私にもヒベルニア探しを手伝わせてく
ださい。私の祖母もヒベルニアは実在すると言っていました。ヒベ
ルニアの地を踏みたかったと最期の時まで悔やんでいたはずです。
私が祖母の代わりにヒベルニアへ行くことができれば、祖母はとて
も喜ぶと思うんです」

まじかよ、と仰け反って叫ぶジャックの横で、ジョージ・ロツキンガムは深く頷いた。

「いいだろう。だが、アヤ君……その話は二度としない方がいい」「え？」

「ヒベルニアを聖地としているのはクラシック教徒だけだ、君のお祖母さんは恐らくクラシック教徒だったんだろう。もし彼らの縁者と知れば君も教会に睨まれる」

ジョージ・ロツキンガムの忠告に、アヤは黙って首を縦に振った。祖母が異端と呼ばれるクラシック教徒であったことをアヤは知っていた。首をかしげたのはジャックだった。

「ん？そのクリケット教徒ってのは、みんな改宗したんだろ。じゃなかったら処刑されたって歴史で習ったぜ」

「人は自分の信じるものをそう簡単に変えられないものさ。俺の友人曰く、クラシック教徒はヨーロツパ中に潜んでいるそうだ」

「双子の魂百までってやつか」

アヤは指を三本立ててジャックの鼻先に突きつけ、ジョージ・ロツキンガムは再び孫を無視して話を続ける。

「そいつが言うには、ヒベルニアを探している人間は三種類いる。ひとつは俺たち金の亡者ども。気象兵器を手に入れてひと儲けを企む連中だ。もうひとつはエディンバラ教会。奴らはクラシック教徒の反乱を恐れていて、中でもヒベルニアの勢力は目の上のたんこぶだ。人質にしている名誉司教を餌にすればヒベルニアのクラシックどもを従えることもできるかもしれないと踏んでいるんだろう、ヒベルニアを見つけ出したら、ヒベルニア人の弾圧に走るのには目に見えている。そして最後に、クラシック教徒たちだ。ヒベルニアは彼

らにとって聖地だが、そこへ行く方法は謎に包まれている」

その島は誰も見つけてはいけない島なのではないか。そんな疑問がアヤの脳裏を横切った。だが、いずれ誰かが見つけてしまうのなら、自分の手で見つけたい。そしてできることなら、祖母が想いを馳せたヒベルニアを守りたい。気象兵器とやらが悪党の手に渡らぬようにしたい。もしかしたら、そのためにジョージ・ロッキングムを裏切ることになるかもしれないが。

「君のお祖母さんはヒベルニアを目指す手がかりを何か残していないものかね？」

アヤの思惑など知らないジョージ・ロッキングムは、ヒベルニア探しの最初の糸口はないものかと頭を抱えていた。アヤは平静を装いつつ古い記憶を探った。祖母が亡くなってもう十年経っている。

「たしか、ヒベルニアへ行く方法はクラシックのリーダーのマキシム・バルトロメの妻と弟しか知らないと言っていました。ヒベルニアへ行く方法を知っているのに彼らはなぜ船を出さないのだろうと祖母は不満を口にしていたように思います」

「妻というのはともかく、弟というのはギーヴ・バルトロメ名誉司教猥下のことだな」

「ギーヴ・バルトロメ猥下？どなたですか？」

「普通の人間は知らない男だ。年をとらない、聖なる妖怪さ。外見は三十そこそこだが、本当の年齢は百九歳と言われている。幽閉された塔の中でクラシックに関する研究をしているというが、クラシックが反乱を起こさないように捕らえられた人質だ。ギーヴ猥下に接触する方法と、生きていればの話だがマキシム・バルトロメの妻の

居所を並行して探ってみよう」

祖父の言葉に誰よりも勇ましく立ち上がったのはジャックだった。

「聖なる妖怪に、異端の残党、御伽噺の島に、氣象兵器とくらあ、そりゃー面白そうだ！よし、俺もやるぜ！」

ジャックは軽いノリで笑いながらアヤの肩を叩いた。いつものことながらアヤは呆れ果て、ジャックに二言三言の小言を告げる。だからその横でジョージ・ロッキンガムがつぶやいた言葉は、彼自身の耳にしか届かなかった。

「御伽噺と言って笑っていられるのは今のうちかもしれんぞ」

そうしてアヤ・ソールズベリは家を飛び出し、ロッキンガム東方貿易会社に雇われた。たった三ヶ月間だったが、彼女は用心棒としての身のこなしを学び、体力や筋力をつけるための訓練や射撃の練習に明け暮れ、魔法を覚えるなど血のにじむような努力をした。特に男性と比べて体力的に劣る彼女は魔法の習得に没頭した。人之道にはずれると教会が忌み嫌う魔法を扱うことは、祖母を弾圧した教会への復讐になるような気がしてアヤはその行為に快感さえ覚えた。

遠い日にかわした約束は追い風を受け、今や彼女の胸に熱く燃え盛っていた。

ウイスキー修道院侵入当初、アヤはもう少しスムーズに事が進むと思っていた。シスター・アンジェラを脅して必要な情報を聞き出すくらい朝飯前だと思っていたのだ。拳銃や弾薬は多めに持って来

てはいたが、三対一となれば、ここから離脱するだけでやっとの装備である。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

アヤはそう言って、シスター・アンジェラに拳銃を向けた。出直した方が賢明かもしれないという考えが頭をよぎったが、マキシム・バルトロメの妻と弟が二人揃って目の前にいることを考えると、引き下がるわけにはいかないという気持ちの方が大きかった。

「ヒベルニアって、御伽噺のオバケ島だろ？そんなわけ分かんないもののために、ばあちゃんに拳銃なんか向けるなよ」

長椅子の影に隠れていたコルガー少年がすつくと立ち上がり、憤るでもなく、恐れるでもなく、平然と言った。気負いのない自然体な彼の言動に、アヤは一瞬ひるんだ。彼女はアンジェラに向けた拳銃を握り直す。少年がただの命知らずならいいが。

「君はシスターのお孫さん？」

年下の少年に対して、アヤはできるだけ友好的に微笑んだ。得体の知れない相手だ、なるべく優しく、刺激しないに越したことはない。だが、色気より飲み気のコルガーはただ顔をしかめた。

「修道女に子や孫がいるわけないだろ。オレはこの住人だ」

「そう。でも彼女にはマキシム・バルトロメという夫がいたのよ」

アヤはどうやって情報を聞き出そうかと考えを巡らせる。彼女が求めているのはヒベルニアへ行く方法、たったそれだけだ。

「ねえ坊や、本当のことを教えてあげましょうか。ヒベルニアはオバケ島なんかじゃないわ。一年中花が咲き乱れ、あらゆる果実が実り、雪山の下に余るほどの黄金と宝石が眠り、世界で最も美しい城があるといわれている理想郷よ」

それはアヤが祖母から聞いた話だ。

「理想郷？オレは子供のころ、ヒベルニアにはオバケがいるって聞いたぞ。悪いことするとヒベルニアへ連れて行かれるぞ、って言われなかった？」

そうだよね、とコルガーが同意を求めるとシスター・アンジェラは困ったような顔をした。アヤは苛立つ気持ちを抑えて軽く頭を振る。少年は本当に何も知らないのだ。

「いいえ。ヒベルニアはそんな場所じゃない。そもそも架空の島なんかじゃないわ。その島にはエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒たちが住んでいるの。このギーヴ猊下の兄君マキシム・バルトロメヤ、ヨーロッパ大陸から逃げ出したクラシック教徒やその子孫たちがね」

「ヒベルニアに人が住んでる？冗談だろ」

コルガーは苦笑して、助けを求めるように再びアンジェラやギーヴの顔を見た。二人とも口を閉ざしたまま、否定も肯定もしない。

「坊や、一七〇五年のクラシックの大打進のことは知ってる？」

「歴史の授業で習ったよ。クラシック教徒って、エディンバラ教会の教えに反する悪魔を信仰してたんだろ」

「いいえ、クラシックが崇めていたのは神の四人の妻よ。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神と言ったの。神が太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、私たちの住むこの世界を創り上げたその時、同時に四人の美しい女神たちを生み出した、そう信じているのがクラシック教徒よ」

アヤ自身はその教えを信じてはいない。もはや彼女が何かの宗教を信じることはないだろう。エディンバラ教会の裏の歴史を知れば知るほど、宗教そのものに対する不信がつり、クラシック弾圧の歴史を知れば知るほど、信仰への執着が招いた悲劇に胸が悪くなるのだ。

「シスター・アンジェラやギーヴ猊下はクラシック教徒。シスター・アンジェラはクラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの妻で、ギーヴ猊下はマキシム・バルトロメの弟。マキシムはクラシック教徒たちを率いてヒベルニアへ渡ったけれど、この二人は大陸に留まったの。二人とも後からヒベルニアへ向かうはずだったのにそうしなかったと、私の祖母が言っていたわ。行き方を知っているのに行かなかったと」

アヤはアンジェラとギーヴへ視線を移した。何か言いわけでもして情報を漏らしてくれればいいのに、二人とも黙ったまま微動だにしない。アヤは唇をかんた。もしヒベルニアへ行く船が出たとしたら、祖母は喜んで乗ったことだろう。しかしアンジェラもギーヴもヒベルニアを目指さなかった。そう考えると彼らが恨めしく思えてならなかった。

「私たちのことに詳しいと思ったら、あなたのお祖母さんはクラシックなのね。もしかして一七〇五年の大打進に参加していたんじゃない

ないかしら」

しばらく続いた沈黙を破ったのはアンジェラだった。銃口を向けられているにも関わらず、彼女の声はしっかりしている。これまで幾度となく修羅場をくぐりぬけてきただけのことはある、アヤは唇だけで笑った。

「ええ。祖母は熱心な信徒だったわ。そしてマキシム・バルトロメを慕っていた。大怪我をしていなければヒベルニアまでお供したのに、って」

アヤは祖母が行くことのできなかったヒベルニアの話やマキシムたちの話を聞いて育った。エディンバラ教会へ抗議の進行を行った時の思い出は特に好んで聞かせてくれた。祖母はマキシムに心酔していた。

「あなたたちが船を出さないのなら、私がヒベルニアへ行くわ。だからヒベルニアへ行く方法を教えて頂戴」

アヤは銃口をアンジェラの後頭部にこすりつけた。ギーヴは思案するように指先でのんびり頬をかくと、ゆっくりとした口調で言った。

「あ、あのね、俺たち、ヒベルニアへ行くよ」

4・天に選ばれること

ギーヴのあつさりとした答えにアヤはぽかんと口を開けた。

「え？」

「だから、俺たちこれからヒベルニアへ行くんだ」

ギーヴは中央の通路まで歩み、身をかがめて床に片膝を着いた。小さな祭壇や何も描かれていない壁をゆっくりゆっくり見回し、それから頭を垂れて口の中で祈りの言葉を唱える。ここは、彼にとって神聖な場所なのだ。コルガーは彼の一拳手一投足を目で追った。

この人は本当に神の僕なのだ。

やがてギーヴは立ち上がり、困ったような顔でアヤを見下ろした。彼の大きなシルエットが入口に浮かび上がり、風に吹かれた法衣のひだが扇のように広がる。

「良ければ君も一緒に来る？」

さらりと言ったギーヴに、アヤは言葉を失ったように凍りついた。彼女は数秒間まじまじとギーヴの顔を見つめ、それからようやく切り返す。

「な、何を言ってるのよ！」

「だって君、ヒベルニアへ行きたいんでしょ。エディンバラ教会の関係者ならお断りだけど、君のお祖母さんは大行進にも参加したクラシックだっていうし、一緒に連れて行ってもいいよ」

「わ、私はねえ、ある組織に雇われてるの！そいつらはヒベルニアの異常気象の原因をつきとめて、それでお金儲けするのが目的なのよ！要するに金の亡者よ！」

そこまで言うてからアヤはしゃべり過ぎたことを悔やむように口を覆った。アヤたちの目的を聞いてアンジェラとコルガーは目を見張ったが、ギーヴは驚かなかった。

「知ってるよ。異常気象の原因が本当にヒベルニアにあるのなら、それを利用しない手はないよね。どこから嗅ぎつけたのか知らないけど、列強国はみんなヒベルニアを狙ってる。どうせ君を雇っているのも、どこかの国が企業でしょう」

ギーヴの静かな指摘に、アヤは自棄を起こしたように言った。

「ええ、そうよ。夢のような話だけど、気象を操ることができれば、自分の国にだけ太陽を輝かせ、他国を飢えさせることができる。作物を輸出すればその値段は跳ね上がり、大きな利益を得ることもできる。信じがたいけど、そういう非情なことを狙っている人間が実際にいるのよ。私の雇い主もそう。でも、それを知っていて、よくも一緒に行こうなんて言えるわね！」

「だって、人質とってるのは君の方だろ。それ以外にどうしろって言うの？」

アヤははっとして銃を握り直した。動揺したせいかアンジェラに向けた銃口が下がっていたのだ。彼女は心を落ち着かせようと深く息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「……ヒベルニアへ行く方法を教えて。それだけでいいの」

アヤは言い切らないうちに呻き声を上げて床に両膝をついた。

「そんなこと、してやる必要ないよ」

コルガーは誰にも気づかれないうちにアヤの背後に回り、彼女の
手から銃をもぎ取り、ついでに鳩尾に肘で一撃をくれたのだ。付け
焼刃とはいえ用心棒としての訓練を受けたアヤが少年の近づく気配
を全く感じなかった。アヤは歯を食いしばり、コルガーの顔を見上
げた。コルガーは手の中の銃を珍しそうにしげしげと眺めている。

「こついうの、あると便利なんだろうけど、えい」

それは粘土をこねるような動作だった。コルガーの手の中で、鉄
製の拳銃がぐにやりと折れ曲がった。少年はそれを丸めてすっかり
球状にしてしまうと、足元にばいっと投げ捨てた。

「なっ……何を！」

アヤが立ち上がった後ずさった隙にコルガーはアンジェラを抱き
かかえて跳躍した。美しいアーチを描いて着地したのはギーヴの後
ろ、礼拝堂の扉の前だ。

「まだやる？ 女の人を痛めつけるのは趣味じゃないんだけどな」

そう言いつつ、コルガーはギーヴにアンジェラを預け、アヤの方
へ進み出る。神聖な修道院へ踏み込み、喧嘩を売って来たのはアヤ
の方だ。遠慮する理由はない。

「気をつけて、あれはただ者じゃないよ」

ギーヴがささやくと、コルガーは皮肉っぽく笑った。

「オレも似たようなものだから、釣り合いが取れてちょうどいいかな」

コルガーが自分の超人的な肉体能力に気がついたのは物心ついてすぐだった。ほんの子供だったコルガーと一緒に遊んでいた兄の手の骨を折ってしまったのだ。兄には大泣きされ、両親からはこっぴどく怒られた。そしてアンジェラだけが、優しくこう言ってくれたのだ。

『あなたは神々から素敵な贈り物をもらったのね』

自分が他人と違うとどれほど思い知っても、彼女のその言葉があれば乗り越えられると信じて生きてきた。

「君のは生まれつきでしょう、彼女とはまるで違うよ。彼女は禁じられた古の知識を詰め込むことで魔法を後天的に体得している」

ギーヴは答え、アヤの姿を見た。コルガーも彼女に目を向ける。育ちのよさそうな美しい女性がなぜ魔法に手を染めたのかは分からない。だが、彼女が本気だということは分かった。彼女は本気でヒベルニアへ行く方法を手に入れようとしている。

「俺たちはヒベルニアへ行く。君たちは、その後をつけてくるといい」

音が反響するように設計された礼拝堂にギーヴの声が響いた。余裕を取り戻した女の笑い声がそれに重なる。

「私たちはヒベルニアの気象兵器を狙ってるのよ。一番にたどり着けなければ意味はないわ」

「俺たちは気象兵器なんかに興味はないよ。第一、君たちが望むような気象兵器は存在しない。この空を雲で覆ったのは極光の女神だ。彼女は人間の言うことなんか聞かない。マキシムと俺以外の言うことなんか聞かないんだよ」

極光の女神。

ギーヴの口からするりと出た言葉は何とも甘美な響きを持っていた。

「……どういうこと？」

「俺たちは遠い昔の約束を果たし、極光の女神を止めるためにヒベルニアへ行くんだ」

「遠い昔の約束？」

アヤはオウム返しに訊ね、眉をひそめる。その一瞬の後、コルガーは鼻孔を刺激する不快な匂いに気が付いた。開け放たれた扉の向こうから、ウイスキーの香りに混じって焦げくさい匂いがした。

「まさか……！」

礼拝堂を飛び出したコルガーの目に飛び込んで来たのは、果樹園の方角に揺らめく真つ赤な光だった。

「火事だー！火事だー！かなりやばい大火事だー！」

炎の向こうから若い男の間延びした声が聞こえ、コルガーは走り

出した。男手がなく、閉鎖された修道院で火事ほど恐ろしいものはない。

少年が超人的な速度で走り去ると、アンジェラは深いため息を吐き出して礼拝堂の外に出た。ギーヴとアヤもそれに続く。

「あの果樹園には大切な林檎の木があったの。思い出の林檎の木がね。火をつけたのはあなたのお仲間でしょう、今夜はもうお引き取り下さい」

憤るでも悲しむでもなく、アンジェラは静かに告げた。その時アヤは、彼女の茶色の瞳が少年の目にとてもよく似ていることに気がついた。

「……ありがとう」

アヤはギーヴとアンジェラを交互に見つめてそう言った。何があるがとうなのかアヤ自身も分からぬまま、彼女は脱兎の如く逃げ出した。その足の速さや身のこなしは、やはり魔法に手を染めた者のそれだった。

「アンジェラ、早くみんなを起こして、門を開けて外に逃げるんだ」「大丈夫よ、猊下。コルガーが何とかするわ。神々はね、あの子の期待を決して裏切らないの」

「それでもだめだよ。逃げて」

自信たっぷりのアンジェラに言い捨て、ギーヴは緩慢な動作で柔

らかな冬草の上を走った。本人はとても急いでいるつもりだ。ギーヴが林檎の木が密集する果樹園にたどり着くと、コルガーは夜露に濡れた草に片膝をつき、両手を組み合わせて燃え広がる炎を見つめていた。

「コルガー？」

ギーヴが後ろから声をかけると、少年はぱっと顔を上げ、朗らかに笑った。

「オレがこうすると雨が降るんです。雨が必ず助けてくれるんです。この人たちはみんなオレの家族ですから、オレが何とかするんです」

当たり前とでもいうような、自信に満ちた顔だった。子供のころのアンジェラにそっくりだなと口の中でつぶやき、ギーヴは微笑んだ。暗い空を見上げると、鉛色の雲が空を覆っている。三月地震以来ずっと居座り続けているその分厚い雲が雨を降らせたのは、ここ数カ月でも数えるほどだ。

「ばあちゃんはおれの天使なんだ。みんなや修道院に何かあれば、ばあちゃんが悲しむでしょ。それはだめなんです」

「天使？骨と皮の？」

「そう、骨と皮の！」

ギーヴはおかしくなって吹き出した。二人がけけら笑うと、それに同調するかのように雷が低く呻いた。ギーヴは少年の隣に立ち、彼が組み合わせた小さな両手に片手を置く。その瞬間、コルガーは息をのんだ。

「あ」

ぽつりと少年の手の甲に雨粒が落ちてきた。夜明けの遠い闇の中、しとしとと救いの雨が降り出したのは間もなくだった。雨脚は次第に強くなり、肌に当たると痛いほどだ。二人はあつという間にずぶ濡れになり、果樹園を蝕む炎の手は脆くも崩れ去る。白煙を上げながら赤い光が消えていく。

辺りが再び暗闇に包まれると、ギーヴはコルガーの手から自分の手を離れた。その途端、何かで遮ったように雨がぴたとやんだ。

「……あなたは何者ですか」

組んでいた手をほどき、コルガーは立ち上がった。それでも、彼がギーヴと目を合わせるには顔をうんと上げなければならなかった。ギーヴは濡れた髪をかき上げ、首をかしげて微笑む。

「答えになってないかもしれないけど　俺はバルトロメ家の人間だ。君と同じだよ」

二人はお互いの目の中に、自分と同じものを見つけた。それは、人と違う何かを持って生れたものの悲しみだ。誰も、天に選ばれることを望んだわけではなかった。

「同じかあ」

コルガーは肩をすくめ、空を仰いで息を吐き出した。その唇には、わずかに笑みが浮かんでいた。同じ悲しみと同じ喜びを噛みしめ、ギーヴも微笑んだ。

5・異端の女神（前書き）

クラシックの歴史についてのギーヴの朗読から始まります。

5・異端の女神

「むかしむかし、古代のヨーロッパにおける宗教の中心地はバチカンでした。バチカン教会は古くからの教えを守り、神を崇め、神の四人の妻を女神と呼んで慕っていました。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神といいました。

神とは自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすものです。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、四人の美しい女神たちとこの世界を同時に創ったといわれています。

中世になると、異民の侵略によって弱体化した教会は、権力を別の都市へ移します。教皇はエディンバラに移り住み、教会は以後、エディンバラ教会と呼ばれるようになりました。それから間もなく開かれたのがグリーンヒル公会議です。この七日間に渡る話し合いの末、教会は神を唯一神とし、四人の女神たちの存在をこの世から抹消してしまいました。妻の存在を隠して神から人間性をとりあげ、神を唯一無二の超越した存在に仕立て上げることで、教会の権力を強めようというのが教会の狙いでした。

聖書や福音書が書き直され、あるものは焼き捨てられました。女神の描かれた宗教画や壁画やステンドグラスも失われました。彼女たちを讃える歌も歌うことを禁じられました。それまで妻帯することができた聖職者たちは次々と離縁させられ、彼らの家族はばらばらになりました。失いかけた教皇の権威を取り戻し、教会を建て直すためだけに、神も人間も人間らしさを奪われたのです。

しかし、やがて新たな宗派が生まれます。ルネッサンス文化とともに生まれた考え方です。ルネッサンスとは、迷信や聖書を鵜呑み

にし、エディンバラ教会の言いなりになっていた中世に差し込んだ理性という名の光です。もちろん、その考えに賛同した者の多くが知識人ではありませんが、盲目的に聖書を信じる者は減りました。科学に目覚める者も、美や欲望を追い求める者も現れました。それは暗黒のような中世を抜けた、輝かしい近世の幕開けだったのです。

中世以前に存在していた人間らしさを追求する彼らは、古代遺跡から発掘された情報をもとに、女神たちを崇めるようになりました。配偶者を持ち、自分たちと同じように笑い、怒り、悲しむ魅力的な神々を、彼らは心から愛したのです。それは瞬く間にヨーロッパ中へ広まり、『古典へ帰れ』と唱えた彼らはいっしょに『クラシック教徒』と呼ばれるようになりました。

それが再び、中世の暗闇に飲み込まれたのが一七〇五年のことです。エディンバラ教会がクラシックの教えを改めて異端としたのです。教会は、唯一絶対の神に妻など存在しないと、もう一度、女神たちの存在を公に否定しました。

ルネッサンス期に好んで制作された女神の絵画や彫刻は破壊され、彼女たちについて書かれた本は焚書の憂き目に遭いました。中世に行われた悲劇が再び繰り返されたのです。知恵をつけ、賢く自由になった人々の心が聖書から離れていくことを教会は恐れたのでしよう。教会は神が高潔で唯一無二の存在であることを徹底的に説き、女神たちをもう一度歴史から抹殺したのです。神がいつも人々の心を惹きつけ、スポットライトを浴び続けるただ一人の英雄でいられるように。

中世に起きた最初の女神末梢の時、人々は教会に従いました。彼らは女神を忘れ、唯一神と教会を信じました。しかし、今度は違います。クラシック教徒たちは改宗を迫られると集会を開きました。

力を合わせて抗議し、エディンバラ教会の決定を覆そうとしたのです。その運動のリーダーがマキシム・バルトロメという男です。彼はフランスの漁村オンフルールの修道士でした。マキシムは妻と弟の助けを借り、ヨーロッパ中のクラシック教徒に呼びかけ、フランスから海を渡り、エディンバラへ向かって抗議の大神進を始めたのです。マキシムたちと共に歩いたクラシックの数は千とも万とも言われています。

もちろん、エディンバラ教会は黙っていませんでした。大神進のために留守になったクラシックの教会や修道院へ立ち入り、女神崇拜の象徴を没収して回ったのです。没収された絵画や古代の聖書は街の中央広場にうず高く積み上げられ、歴史的に価値のある物さえ容赦なく火をつけられました。弾圧は厳しく、マキシムたちは行進の途中で、教会との武力衝突を繰り返します。それによって多くの死者や怪我人を出し、やがて彼らはヨーロッパを去ることを決めました。ヨーロッパを出て、西の果てにある島ヒベルニアを目指そうとしたのです。

しかし、マキシムの弟は言いました。

『だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか』

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に意を唱えるのは、彼にとって初めてのことでした。

『まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきつとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか』

マキシムは答えます。

『待つてくれ。俺は諦めたわけじゃない。俺たちは信仰を諦めないためにヒベルニアへ行くんだ』

すると弟は首を横に振りました。

『エディンバラ教会は規律ある中世へ戻れという。クラシック達は古典へ帰れという。俺は古典でも中世でもない、この時代らしさを、ここで探したい。いろいろな信仰や思想が共存できる、この時代らしい信仰の在り方を』

弟は迷いのない言葉が続けます。

『だから俺はエディンバラへ行くよ』

『よせ、殺されるぞ！教会が俺たちに容赦しないことは十分に分かっただろう！』

『いいや、教会は決して俺を殺せない。俺に危害を加えればクラシックが黙っていないことは教会も知っているんだ。何より、俺が殺されたとしたらおまえが何をしでかすか。教会はその事態を恐れているはずだよ』

弟はマキシムを安心させるように柔らかく微笑みました。

『今まで宗派も国境も世代も越えて、色んな人たちと意見を交わしてきたんだ。これまでのように彼らと共に暮らすことができなくなるなんて嘘だ。どうして、みんな一緒にいられないんだ？おかしいだろう？ だからまだ、諦めるのは早いと思うんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。どうかそれま

で待っていてくれないか』

弟が頑固に言い張るのでマキシムはしぶしぶ頷きました。

『君は来てくれ、アンジェラ』

妻が大陸に残ることを、マキシムは頑なに認めませんでした。誰がヨーロッパ大陸に残っても、彼女だけは自分と一緒に来てくれると思っていたのです。

『マキシム、よく考えて。ヒベルニアへは長い航海に耐える体力がなければ行けません。ここには怪我人のクラシックがたくさんいるし、どうしても故郷を捨てられない人だって、新しい土地へ旅立つ勇気がない人だっているわ。彼らの面倒を誰が見るの？ 故郷に帰すにしても、時間と労力は必要だわ。語学力と統率力のある人間が何人かここへ残らなければ。彼らを見捨てたとになれば、あなたは人々の信頼を失うことになります。私が残れば、誰にもあなたの悪口は言わせません』

『俺は実の弟を残していくんだ、それで十分じゃないか』

『マキシム、この戦いで愛する者を失った人はたくさんいるわ。家族と別れなければならなかった人も。でも、生きてさえいれば、きっとまた会える。私たちにはまだ命がある。それだけで無限の可能性があるの、私たちにも、この子にも』

妻はそう言って大きな自分のお腹を撫でました。彼女のお腹にはマキシムの子供が宿っています。口ごもるマキシムに弟が提案します。

『マキシム、俺がヒベルニアへ行く時は、彼女と、おまえの子供を

連れていくよ。必ずだ、約束する』

妻も口を添えました。

『マキシム、元気な赤ん坊を産んで、こちらでの仕事が全部済んだら、その時は私も必ず行くわ、ヒベルニアへ』

マキシムはようやく承諾し、二人はしっかりと抱き合いました。

『きつとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム』

ぼろりと妻の瞳から涙がこぼれました。

『ああ、約束する』

『約束だ』

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。ひとりにはクラシック教徒を率いて西の果ての島ヒベルニアへ。もうひとりには教会との共存を夢見てエディンバラへ。最後のひとりは大陸に残ったクラシックを故郷に帰した後、抛り所のないクラシックを連れてアイルランドへ移り住み、修道院をつくりました。彼らの約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています

コルガーとギーヴは濡れた服を着替え、ウイスキー修道院の広間で暖炉に当たっていた。二人は毛織の絨毯に並んで座り、薪の燃える音を聞きながら、ギーヴは紅茶を、コルガーはウイスキーを口に運ぶ。厨房から、アンジェラがスープを温めるいい匂いがした。

「これはヨイク・アールトという民話学者が書いたもので、頼まれて内容をチェックしたところなんだけど、どう？俺の話とクラシックの生き残りの日記を元にしたらいいんだけど」

ギーヴは視線を上げた。スープの入った皿を手に持ったアンジェラが戸口に立っていた。彼女はくすくすと笑い、温かいスープをコルガーとギーヴの前の床に置く。

「そうね、とても懐かしいわ。でも、ちょっと美化され過ぎなんじゃないかしら」

「君もそう思う？なんだか恥ずかしいんだよねえ。話が大げさすぎるっていうか」

ギーヴとアンジェラは微笑み合い、コルガーに目を向けた。少年はギーヴの手から紙の束を受け取り、熱心にめくっている。ヨイク・アールトという名はコルガーも知っていた。民話だか御伽噺だかを集めて大衆向けの本にした学者で、コルガーもそのベストセラー本を読んだ覚えがある。ユーモラスな新聞広告で話題になった本だ。

「冷めないうちに食べなさい」

見かねたアンジェラが声をかけると、コルガーとギーヴは両手を組んだ。

「あなた方の恵みに」

感謝の言葉をささげてスプーンをとりながら、コルガーははつとした。子供のころから食事の前に唱えるように言われていたこの言葉の「あなた方」というのは、神と四人の女神のことだったのだ。知らず知らずのうちに、自分の中にはクラシックの教えが根づいて

いる。だが、コルガーは不思議と嫌な気持ちにならなかった。

「ばあちゃんや、猊下の事情は分かりました」

じゃがいものスープをみんな胃の中におさめてしまつと体が芯から温まつた。コルガーは本格的な眠気を感じた。

「でも、ヒベルニアって本当にあるんですか？」

コルガーは膝を抱え、大あくびをしながら訊ねた。つられたようにギーヴもあくびをする。

「うん、正直、俺も百パーセントの確信は持てなかったんだけど、九月に教会がマキシムの孫娘を保護したんだ。彼女はヒベルニアからやってきたと言っていて、どうやらそれは本当らしい。マキシムは今、ヒベルニア王と呼ばれてるんだってさ」

今度は二人同時にあくびをした。ギーヴは絨毯の上に寝転がつて丸くなった。毛織の絨毯は硬くて寝心地が悪かったが、それが気にならないほど疲れていた。

「ヒベルニアという島はね、もともと、古の教えに登場する、女神たちの聖地なんだ。それが転じて御伽噺や怪談になったんだよ。悪いことするとヒベルニアに連れて行かれるぞっていうのは、クラシック教徒たちが聖地を隠すために流したデマだね」

へええと感心しながらコルガーもギーヴと同じように寝転がる。ギーヴはとうとう目を閉じた。

「そのヒベルニアへ行く方法を猊下は知ってるんですか？」

「もちろん。後を追うってマキシムと約束したからね」

「じゃあ、本当にヒベルニアへ行くんですか？」

コルガーは訊ね、なかなか返事が返って来ないのを見かねてギューの顔を覗き込む。金褐色の長いまつげはぴくりとも動かず、規則正しい寝息が聞こえ始めたのは間もなくだった。

6・ロッキンガム東方貿易会社（前書き）

場面が一転します。

6・ロッキンガム東方貿易会社

アヤ・ソールズベリとジャック・ロッキンガムはウイスキー修道院から逃げ出し市街地を目指していた。ヨーロッパの辺境と呼ばれるこの国にも、ロッキンガム家の所有する商館がある。

辻馬車がいるような時間ではないので、男装の麗人と茶色のジャケットとパンツ姿の美丈夫は自分の足で路地を歩いた。薄暗い裏道には浮浪者が何人も寝転がっていたが、不機嫌な顔で先を急ぐ二人のイングランド人に絡んでくる者は幸いいなかった。

「しくじって悪かったわ、ジャック。相手を舐め過ぎてた」

歩調を緩めず、アヤは言った。敗北感に苛まれながらも、彼女にはやはり女王のような気品と風格がある。二人は中央広場に面した五階建ての商館の前で立ち止まった。築百年は経っている古い建物だ。入口には金色の文字で「ロッキンガム東方貿易会社」と書いてあった。

「気にすんなよ、収穫ゼロってわけじゃなかったんだし」

「でも目的はヒベルニアへ行く方法を聞き出すことだったのに」

「ああ、でもギーヴ猊下が言ったんだろ、彼らの船について行っていって。まあ、そうなるとヒベルニアに一番乗りってわけにはいかないけど、それでもいいんじゃないの？うちのジジイの望みは叶うんだろ？」

そのとき、使用人によって商館の扉が開かれた。二人は暗い建物の中に入り、ほとんど手探りで階段を上って二階の一室に滑り込ん

だ。

ジャックはすぐに応接セットのソファに倒れこむ。アヤは窓に近づいて、締め切られた重いカーテンを開けた。月も星も雲に覆われているが、ほのかな明かりが応接室の空気に滲む。

「ねえ、ジャック。私の望みが、ジョージおじいさまの望みと真逆のものだったら、あなた、どうする？」

ジャックは目を丸くして身を起こした。

「はあ？」

「私、ヒベルニアの気象兵器なんてどうでもいい。私は祖母の夢見たヒベルニアの地を踏みたい。できることなら、ヒベルニアを守りたい。私の本当の望みはそれだけなのよ」

言いながら、アヤは祖母のことを思い出していた。今夜やたらと彼女のことを思い出すのは、ウイスキー修道院で仲睦まじい老シスターと少年のやりとりを目にしたせいかもしれない。

ジャックは乗馬用のブーツをはいた脚を組み、おもむろに頭をかいた。

「あのよー俺も聞いていい？いまいち分かんないんだよなあ。アヤのお祖母さんって、あのばあやのことだろ？……血、つながってないよな？」

アヤの両親がジャックの訪問を嫌がったため、彼はアヤの家に入ったことがあまりない。だが子供の頃、二人が日暮れまで遊んでいると、青いドレスにエプロンをつけた白髪の老婆がアヤを迎えにや

つて来たものだ。

「ええ。彼女はうちの使用人の一人だったわ。でも、私にとっては、たった一人のかけがえのない家族だった」

アヤは父親の不義の子だった。物心ついた時から兄や姉と明らかに差別され、母親からは暴力を振るわれて生きてきた。自分の夫とメイドの間にできたアヤをいじめる母親からアヤをかばってくれたのが祖母だった。アヤを愛し、慈しんで育ててくれたのは、愛する「ばあや」だけだったのだ。アヤは彼女の恩に報いたかった。

「そういえば、そういうあなたは どうしてヒベルニア探しに加わったの？面白そうだからってだけじゃ割に合わないと思うけど」

アヤが首をかしげると、ジャックは胸を張って冗談めかして笑った。

「しゃあねえだろ。強情なダチが、どうしても行くなって聞かねえからよ」

木枯らしが窓の外の木々から茶色の葉をもぎとって去ってゆく。隙間風が足元を通り過ぎて身を凍らせる。ジョージ・ロッキンガムを敵に回すかもしれない。ヒベルニアの地を踏むために命を落とすかもしれない。様々な不安が浮かんでアヤの心を重くしたが、それでも、ジャックがいればどこまでも行けるような気がした。何だっでできるような気がした。

アヤが両肩を上げて破顔すると、幼馴染みもにっこりと笑った。リヴァプール中の女性の心を奪うような笑顔だったが、アヤにとっては心強いお守りだ。

「おまえの望みが何であろうと、それがうちのジジイと全然違うものでも、俺はどこまでも付き合うぜ」

親友同士が語らう部屋の前で、その扉に耳をつける者がいた。ロツキングム家当主ジョージ・ロツキングムに氣象兵器奪取を任されたパーシヴァルという男である。長身の筋骨たくましい体は上から下まで黒い衣服に包まれていて、短い髪も切れ長の目も黒い。闇の中で白く浮かび上がる顔は整ってこそいるが見る者に冷めたい印象を与え、帝王のような威厳を感じさせる。年の頃は四十ほどだ。

「やはり信用ならんな」

氣象兵器奪取を狙うロツキングム家を裏切らんとするアヤとジャックの言葉に彼は眉をひそめ、口の中でそうつぶやいた。憤るでもなくそつとその場を立ち去ると、彼は自室に向かった。暖炉に火を入れ、黒いブーツを履いたままソファに横になって毛布を被る。

パーシヴァルはジョージ・ロツキングムたつての願いでアヤとジャックを連れていくことにした。いつもなら子供のおもりなど御免と渋るところだが、今回ばかりは二つ返事で引き受けた。ジョージ・ロツキングムが氣象兵器を手に入れることは、彼の望みでもあったのだ。

だが、アヤはパーシヴァルに心をゆるさなかった。恐らく、パーシヴァルがヒベルニアの氣象兵器に固執し過ぎているからであろう。アヤはジャックだけを連れ、パーシヴァルに黙ってウイスキー修道院へ向かった。彼らはパーシヴァルにばれていないつもりのような

が、イングランド王家に二十年仕えて海軍大佐に上り詰め、三月地震以降ロッキンガム家の特別用心棒として訓練を重ねたパーシヴァルが、彼らの単独行動を見逃すはずがなかった。

生真面目なパーシヴァルにとって、チームワークを乱すアヤたちの行動は不愉快ではない。しかも、どうやら彼らは敗走してきた様子だ。パーシヴァルは一刻も早くヒベルニアへ行くための手がかりを手に入れようと、慎重に確実にシスター・アンジェラの隙をうかがっていたというのに。

パーシヴァルは毛布から顔を出し、炎の影が躍る天井を見つめた。黄金色と暗黒が絡まりあい、溶け合ってまた別れていく。揺れ動く光と影を眺めていると、パーシヴァルの瞼に眩しい記憶が蘇った。

白いレースのカーテンが窓辺で風に揺れていたのを、パーシヴァルはよく覚えている。窓の外から差し込む弱い光と、蜂蜜のように甘く澄んだ声のことも。

『どうか私のお墓は日の当たるところへつくつて。風に吹かれ、雨に打たれ、草や花のように眠っていたい』

空に横たわる分厚い雲を見るたび、パーシヴァルは妻の最期の言葉を思い出した。世界は灰色の雲に覆われ続けていて、半年前に亡くした彼女の遺言を、彼はまだ果たせずにいるのだ。

もう少し待ってくれ、エヴァ。

パーシヴァルは起き上がり、茶色のカーテンを開けた。確認するまでもなく、暗い夜空には晴れることのない雲が横たわっている。

もう少し待ってくれ、エヴァ、今にきつとヒベルニアの気象兵器を手に入れてみせる。そして我らが偉大なボスが定める土地にだけ、太陽の光が降り注ぐ日がやって来る。そうしたら、俺は真っ先におまえの棺をそこへ運ぶぞ、エヴァ。

その時ノックの音がしなければ、パーシヴァルは悲しい思い出の海に身を投げてしまっていたかもしれない。妻の死に顔を目の前から振り払い、パーシヴァルはドアに近づいた。扉を開ける前に神経を研ぎ澄まして廊下の様子をうかがう。そこにいるのはアヤー人のようだった。ジャックは立っているだけで気配が騒がしいので間違いない。

「こんな時間にごめんなさい。話があるの、いいかしら」

パーシヴァルが扉を開けると、アヤは張りつめた表情でそう言った。パーシヴァルは黙ってアヤを見下ろし、武器を持っていないことを密かに読み取る。

「作戦会議をするには不向きな時間だと思うがね」

「そうね。でも密談するには都合のいい時間だと思うわ」

女というのはつくづく秘密が好きな生き物だ。妻もよく内緒ごとを匂わせては「あなたには秘密よ」と人差し指を立てていた。パーシヴァルはアヤにソファを勧め、暖炉の上に置いたブランデーの瓶を取り上げた。

「あなたに謝らなければならないの」

アヤはソファに腰を下ろし、握った拳を膝にのせた。男装していてもすぐに彼女が女と分かるのは、体に染みついた上品な仕草のせ

いかもしれないとパーシヴァルは思った。小柄な妻のしなやかな立ち居振る舞いを思い出しかけ、パーシヴァルは首を振った。

「私に黙ってウイスキー修道院へ行ったことか？」

顔をしかめ、アヤは視線を床に落とした。苦虫を噛み潰したような顔だ。

「知ってたの？」

「私はロツキンガム家の特別用心棒だぞ」

言いながら、パーシヴァルはブランデーを二つのグラスにそそぎ、ひとつをアヤに手渡した。彼女の酒の好みなど知らないが、仕事を失敗した夜に出された酒を拒む人間もそうそういないだろう。

「それなら話が早いわ。ヒベルニアへ行く方法は見つからなかったけど、ギーヴ猊下やシスター・アンジェラと接触できたの。彼らはヒベルニアへ行きたければ自分たちについて来いと。自分たちもヒベルニアを目指すのだと言っていたわ」

「ついて来い？それではギーヴ猊下に先を越されて、気象兵器を奪われるかもしれないということだろう？」

「いいえ、あの人は気象兵器には興味がないとはつきり言ったわ」

それは君もだろう。喉まで出かかった言葉を胸にしまい、パーシヴァルは息を吐いた。パーシヴァルにとってはヒベルニアもクラシック教徒もどうでもいい存在だ。気象兵器を手に入れることができれば他には何も要らない。だから、気象兵器に興味がないと言い切るギーヴの言葉が信じられなかった。それがもし本当なら、ギーヴとパーシヴァルの利害は完全に一致するのだが。

「君が余計な事をしなければ、私はシスター・アンジェラをさらい、ギーヴ猊下から必要なことを聞き出すつもりだった。それは君たちにも話しておいただろう。これで彼らはもう隙を見せない。なぜチヤンスを待てなかった？」

「あなたが目的のためならどこまでも冷酷になれる人だからよ。理由が何であっても、老人に手荒なまねをするのは反対よ。それに、私ひとりで何とかなると思ったのよ」

「仕事を舐めていたということか」

「そうね。甘く見てたわ」

アヤは勢いよくブランデーをあおった。反対にパーシヴァルはグラスを置いて立ち上がった。

「トムとジェリーには民話学者と書籍商をつけさせている。君とジヤックはギーヴ猊下たちを見張れ。彼らが船に乗ったら、こちらもすぐに出港し、奴らの先導によってヒベルニアへ向かう。ヒベルニアへ上陸したら、すぐに奴らを殺す。そのために、君もこれで覚悟を決めろ」

パーシヴァルは酒瓶の並んだキャビネットから一本の小瓶を取り出した。色は黒く、ラベルはない。

「覚悟？」

直感的に身の危険を感じたのか、アヤは緊張した面持ちでパーシヴァルと小瓶を見上げる。パーシヴァルはせせら笑うように言った。

「君はなぜ彼らに負けたか分かるか？彼らはクラシックの女神に愛されている。神に対抗できるのは悪魔だ。昔からロッキンガム東方貿易会社の特別用心棒は、悪魔と契約することで超人的な力を手に入れてきた。私も半年前にアザゼルという下級悪魔と契約を交わした」

「悪魔と……契約？」

「なんだ、知らないのか。ならば見せてやろう」

パーシヴァルは小瓶を床に叩きつけた。ガラスの破片が飛び散り、瓶から黒い霧のようなものが現れる。背筋が凍り、心臓や胃袋を冷たい手で直接撫でられたような気がした。

我が名はミスティク。おまえが差し出すものは何か。

黒い霧の中心から、腹に響くような重低音がした。それは聞き取りにくいが人の言葉だ。

我が名はミスティク。おまえが差し出すものは何か。

「差し出すもの？」

部屋いっぱいに広がる黒い霧に圧倒されつつアヤはパーシヴァルを見た。

「神や悪魔と契約するには交換条件が必要だ。例えば、飼い犬を差し出せばそれなりの力を、両親を差し出せば巨大な力を彼らは貸してくれる」

「あなたは何を差し出したの？」

「分からない。悪魔は契約のために何かを差し出させるが、それを後から人が惜しまぬように差し出した物に関する記憶を消すんだ」

アヤは逡巡するように目を伏せた。

我が名はミスティック。おまえが差し出すものは何か。

「ミスティック。なるほど、確かに霧のようね」

もやもやとした黒いものを見上げ、アヤはひきつったような笑みを見せた。

「私にはあげられるものがないわ。家族も資産も捨てたの。他を当たってちょうだい」

ジャック・ロッキングラム、欲しい。

「だめよ！」

アヤは慌てた。なぜ悪魔がジャックのことを知っているのだろう。

ジャック・ロッキングラム、欲しい。

「だめ！彼は私の持ちものじゃないわ、あなたにあげられない！」

パーシヴァルは自分が悪魔と契約した時のことを思い出した。あの時、パーシヴァルも彼女と同じように「あげられるものはない」と言ったのだ。しかし、パーシヴァルは何かを差し出した。そう、無理やり奪い取られたのだ。何か、とても大切なものを。

「お願いよ、他を当たって！私には、自分以外の何かを差し出すなんてできない！」

懇願し、アヤは扉に向かって後ずさりした。だが、悪魔は愉快そうに低く笑った。

それが答えだな。契約は結ばれた。

悪魔の声がしたとたん、黒い霧がアヤの身体に吸い込まれた。アヤは恐怖に表情を凍らせ、苦しげに口を開閉させて床に倒れ込んだ。

7 ・まだ下せない背中
の荷物がある（前書き）

また、
一転。

7・まだ下せない背中荷物の荷物がある

『欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる』

十歳のコルガーの目の前で、古ぼけた銀の懐中時計が振り子のよ
うにぶんぶん揺れる。暖炉の火が赤々と燃える父の部屋の揺り椅
子で、コルガーは頬を膨らませていた。

『欲しくなーる、欲しくなーる。　　どうだ？欲しくなつたか？』

時計の鎖を持ったまま、父はにかつと笑った。けれどもコルガー
は、そんな古臭いのは嫌だと言う。兄は誕生日にぴかぴか光る新し
い時計を買って貰ったのに。

『あんなのはどこにでもある時計だ。これは世界でたった一つの特
別な時計なんだぞ』

そう言つて父は時計のふたを指でそつとなでた。コルガーはふて
くされながら、父の表情を盗み見た。父はしわだらけの顔を悲しげ
にゆがめ、いつくしむように時計を見つめていたが、すぐにまた時
計を振り出した。

『よーし、こうなつたら別の術をかけてやる。おまえはこれを貰わ
なかったことを、後悔すーる、後悔すーる、後悔すーる、後悔す
ーる、死ぬまで一生絶対後悔すーる……』

あんまりしつこいのでコルガーは観念した。父は満足げに笑つ
て彼の髪をかき回し、へたくそな歌を歌いながら向かいの椅子に腰
掛けた。

ぎんのとけい、きみにあげよう、ぼくのころ、とわのあい。

『おまえは知らないか。私が若い頃に流行ったんだぞ』

コルガーは手の中で時計をもてあそびながら、しばらくの間、父が歌う声を聞いていた。

コルガーは目を開けた。毛布が顎の辺りまでかけられていて、部屋はまだ薄暗い。懐中時計の蓋を開けると五時を指していた。

ああ、あのまま暖炉の前で眠ってしまったのだ。そう思いながら、コルガーは九ヶ月前の三月地震で一度に亡くした家族のことをふいに思い出した。

父や兄は家の下敷きになって死んだ。同じ家の同じ部屋にいらながら、不思議な力でコルガーだけが助かった。屋根や壁が崩れ、あらゆる家具や柱が住人に向かって倒れてきたにも関わらず、コルガーの周りだけが何かに守られてでもいたかのように何も落ちてこなかったのだ。彼はすり傷ひとつ負わなかった。それからというもの、彼は自分が生き残ったことに罪悪感を覚え、ときどき、生きていることが間違いのようにさえ思える。

大好きな人たちがたくさんこの世から姿を消して、もう二度と顔を見ることも触ることも声を聞くこともできないのに、自分がまだ息を吸って食べ物を食べて排泄していることが不思議に思えてならない。ぜんぶ、悪い夢に思えてならない。

そして、妹のことを思うと頭が真っ白になる。
目の前が、真っ暗になる。

コルガーがぎゅっと拳で毛布をつかんだとき、暖炉に薪をくべる音がした。顔を上げるとギーヴ・バルトロメと目が合った。

「あれ、眼が覚めた？」

彼の翡翠のような緑色の瞳は優しくコルガーを見つめた。ギーヴは片膝を立てた格好でコルガーの傍らに座っていた。長い髪を結っていた紐をほどき、襟元を緩め、ゆったりとくつろいでいる様子だった。

コルガーはなぜだか、ほっとした。

「もう少し寝ててもいいかもね」

ギーヴは暖炉に薪を放る。コルガーは半身を起して頭をかいいた。

「……夢じゃなかったんだ。あなたや、変な女が来たこと」

「変な女ね。そういえば彼女、これからどうするつもりなんだろう。ある組織に雇われてるって言っていたけど、雇い主は誰だろう。ひょっとしてイギリス王室かなあ。イングランドの上流階級の言葉を使っていたよね」

「それにしちやお粗末なスパイじゃないですか」

「じゃあイングランドの大富豪かな。どっちにしろ、氣象を操って利益を得ようだなんて、神々をも恐れぬ行為だよ。まったく、経典を書き換えるとか、女神を歴史から抹消するとか、特定の宗派を弾圧するとかさ、本当に人間って」

ギーヴは立ち上がり、暖炉にかけていた薬缶の湯をポットにそそいだ。白い湯気とともに、紅茶の良い香りがふわりと広がる。

「身の程を、知らないよね」

そう言ったきり、ギーヴは黙ってしまった。コルガーはギーヴがのんびりと紅茶を淹れる様を眺めながら、彼の言葉の裏に隠された静かな怒りと信心を感じ取っていた。この人は、実は怒っているのだ。人間の思い上がった行動や、権力の横暴に怒っているのだ。

「そうだ、君に見せたいものがあるんだ。外は寒いから、毛布はそのまま被っていくといいよ」

二人が熱い紅茶を飲み終えた頃、沈黙がようやく破られた。ギーヴは暖炉の火をランプに移し、コルガーが立ち上がるのを待たずに扉へ向かった。

「外？」

コルガーは空のカップを床に置き、毛布を頭から被った姿でギーヴを追いかけた。ギーヴは建物の外へ出ると、林のような庭を真っすぐ横切り、礼拝堂の扉を開けた。夜明け前の闇は深く、ギーヴの持つランプの炎がゆらゆらと礼拝堂内部をわずかに照らす。彼は入口で片膝をついて頭を垂れると、静かに祈りを捧げた。

「この修道院へ来たのは初めてじゃないんだ」

ギーヴは立ち上がり、柔和な表情でコルガーを顧みた。

「前に来たのは六十年前」

「という和一七〇五年ですね。クラシックの大神進の年だ。ええと、猊下って、おいくつなりましたっけ？」

「こう見えて百九歳。でも、あれだね。言っちゃあ悪いけど、君も十八には見えないねえ」

「……失礼な」

コルガーは首に下げた小さな木の札を服の中から引き出した。彼の掌の半分ほどの札には姓名と生年月日、性別、所属教区が彫られ、ベルファスト市の紋章がスタンプされている。

これは四月から携帯を義務付けられた市民証で旅券も兼ねる。三月地震の際、命を落とした人々の身元が分からず、引き取り手のいない数千の遺体を共同墓地に墓標も建てずに埋葬せざるを得なかったことを教訓にエディンバラ教会が取り決めた。普段は首札と呼ばれることが多い。

最初はまるで首輪でもつけられたような不愉快な気分だったが、これさえあれば誰に対しても自分の身分を証明できるのでコルガーにとっては好都合だった。

『コルガー・バルトロメ、一七四七年生まれ、男』

間違いなく十八歳の男だろ、とばかりにコルガーは胸を張った。

「人は見かけに寄らないよねえ」

ギーヴの余計な一言を無視して、コルガーは視線を礼拝堂の奥に移した。目の前にあるのは何の装飾も無い祭壇と壁だ。漆喰で塗り固められた三方の壁にも、天井にも、彫刻のひとつも絵画の一片も

ない。資金不足ここに極まれりといった具合だ。

「それで、オレに見せたいものって何ですか？」

「あ、そうだった。座って、明かりを消すから」

ギーヴは一番後ろの列の長椅子に腰をおろした。コルガーが通路を挟んだ同じ列の椅子に座ると、ギーヴはランプの炎を吹き消した。自分の手さえ見えない闇に覆われ、コルガーは目を閉じた。木々の揺れる音が聞こえ、ふくろうの鳴き声がかすかに届く。五秒後、彼は両目を開いた。

「……ああ」

コルガーはつぶやいた。

それはまるで星座のようだった。四方の壁と天井と床がぼんやりと光を放っていた。よく見ると目の前に広がっているのは彩り鮮やかな絵画だった。建物の内側いっぱい描かれた、一枚の巨大な祭壇画だ。

「見せたいものってこれかあ」

コルガーは驚くでもなく、ぐるりと辺りを眺めまわした。

「君、やっぱりこの絵のこと知ってたんだ？」

「この絵は暗闇の中でしか見えないようになってるでしょう。それも、一度明りに照らして、それから真っ暗にすると数分間だけ光るようになっている。だからオレもこの修道院に住むようになってから気がついたんです」

背景の青空には豊かな白い雲が浮かび、小さな天使が何十人も舞

っている。祭壇の奥の、金色の太陽が輝く手前に男神が立っていて、彼は両腕で空を持ち上げるような格好をしている。隆起した二の腕の筋肉がたくましい。

「神は自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすもの。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、この世界を創ったといわれている」

ギーヴは頭上に描かれた青空を仰いだ。エディンバラ教会が定めた神は一人だけだ。その他に神は居ないことになっている。だが、男神の周囲には、寄りそうようにたたずむ四人の女神の姿があった。四人ともそっくりの姿で、官能的なまでに美しかった。

「雨の女神、雷の女神、虹の女神、そして極光の女神。エディンバラ教会によって存在を消されてしまったが、神には美しい妻がいた。彼女たちが復権したのはルネッサンス初期に古代遺跡を発掘し、独自に女神のことを調べあげた一部の聖職者のおかげだった。それ以降、女神の絵画や彫刻が好んで製作されたけど、それも六十年前にみんな処分されてしまった。識字率が今より低い時代に焚書なんてものがあつたくらいだから、それは徹底してたんだよ。だから、この絵も隠されていたんだ。聖なる術をかけて、弾圧から逃れるためにね」

「……逆行だ。そんなの、中世へ後退してるようなものじゃないですか」

こんなに美しい絵を人々の目から隠さなければならぬなんて悲しすぎる。コルガーは憤った。建築や美術に関心が高いだけに、少年の怒りは大きい。

暗黒の中世からルネッサンスへの移り変わりは、美術史を見ると一目瞭然だ。中世の時代、神や聖人は絵画の中で作り物のように描かれていた。表情は無く、体は薄っぺらで、棒のように直立しているか、人形のように椅子に座らされていた。頭からは後光が差し、背景は描かれないのが普通だった。ルネッサンス期に入ると、宗教画に変化が現れた。神々や聖人がまるで本物の人間のように、瑞々しく、艶めかしく描かれるようになったのだ。神々は服をはだけ、地べたに寝転び、喜怒哀楽を惜しげもなく表すようになった。後光は小さくなり、描かれないことさえあった。背景は写実的になり、リアリティや臨場感が増した。彼らがより身近に愛されていた証拠である。

六十年前、それが再び、中世の暗闇に飲み込まれてしまった。神々は人間らしさを取り上げられ、人々は捻じ曲げられた教えによって真実に目隠しされている。中世へ逆行している。

「神様や聖人に人間らしさを加えた、ルネッサンスの巨匠を侮辱してる」

怒りをこめ、つぶやいた少年の胸にあるのは偉大な芸術家たちのことだ。彼が敬愛する芸術家が、もし女神の彫刻を造っていたら？そしてそれが教会の手によって壊されていたら？

ギーヴは昔の記憶をさぐるように、ゆっくりと語った。

「人々が賢くなって、自由になって、教会は人心が経典から離れるのを恐れたんだ。神を高潔で唯一無二のものに仕立て上げ、いつも人々の心を惹きつけていられるように、女神たちを歴史から抹殺したのさ。俺の知る限り、彼女たちの絵が残されているのはここだけだ。だけどね、コルガー、エディンバラ教会が間違っているわけじ

やないんだよ。クラシックが間違っているわけでもない。信仰に間違いなんてないんだよ」

生き生きと輝く神々の姿を眺め、ギーヴは自分自身に言い聞かせるかのように言葉を紡いだ。

「あれから六十年経ったけど、俺はまだ諦めてないんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。いろいろな信仰や思想が共存できるようになる。まだまだ、しつこく、俺はそう信じてるんだよ」

ギーヴが語る間に、祭壇画の彩りはしだいに褪せていった。壁に浮かんでいた壮大で繊細な絵が消え、淡い光は跡かたもなく沈み、二人の前には暗闇と沈黙が再び舞い降りた。

「さっき、空を雲で覆ったのは極光の女神だって言いましたよね。それって、三月地震の原因も極光の女神にあるってことですか？そもそも極光の女神っていったい何者なんですか？本当に神様なんですか？だとしたらどうして人々を苦しめるようなことをするんですか？」

ギーヴが答えようとした時、礼拝堂の扉が開いた。

「ああ、ここにいたのね。心配したわ」

薄明かりが差し込み、ロウソクを手にシスター・アンジェラがやってきた。

「極光の女神とは、俺や君に不思議な力を授けてくれる張本人だ。今はマキシムと一緒にヒベルニアにいるはずだよ。三月地震やこの

異常気象を引き起こしたのは彼女たちだと俺は踏んでいる。こんなことができるのは極光の女神くらいだから」

歩み寄るアンジェラを目で追いながら、ギーヴは静かに言った。
「コルガーは椅子から立ち上がった。じっとしていられなかった。そして、家族や、妹のことを思う。頭が真っ白になる。目の前が、真っ暗になる。」

「ばあちゃん、ギーヴ猊下」

「コルガーは顔を上げ、大人びた表情で二人を見た。」

「オレ、三月地震で家族を一度に亡くした時、天災だから仕方がないと思った。自然の力にはかないっこないから仕方がないって、ずっとずっと、今まで、自分自身に言い聞かせてきた。妹が酷い目に遭ったのも、仕方がないことだったんだって。でも、もしこのことに人為的な原因があるなら、もしこのことに犯人がいるなら、オレ、そいつにどうしても言ってやりたい。みんなが……妹が死ななければならなかったことの根っこに犯人がいるなら、一発ぶん殴ってやりたい。ギーヴ猊下、ヒベルニアへ行くなら、オレを連れて行ってください」

ためらいなく言い切り、コルガーは胸元で両手を握りしめた。その掌の下で、古ぼけた銀製の懐中時計が静かに時を刻んでいる。

「じゃなきゃ、いつまで経っても、オレは前を向けないような気がするんです」

家族の死が誰かのせいかもしれないなら、それを明らかにしたい。そうでないと、自分の弔いは終わらないような気がする。背中に負

った荷物を、地面に下ろせないような気がする。心の闇が晴らせない気がする。

「その犯人が自分の曾祖父かもしれないなくても？」

ギーヴの問いにコルガーは迷わなかった。彼はうんと顔を上げ、ギーヴの緑色の双眸を見つめた。

「はい」

「そう」

しみりと短く応えたそれがギーヴの承諾のようだった。

「それじゃ、よろしくお願いしますね」

まさにアイルランド男児らしく、コルガーはさっきまでの沈痛な表情を顔から消し去り、ギーヴに右手を差し出しながらにっこりと笑った。ギーヴも彼に倣ってぎこちなく微笑む。

「猊下、私からも、この子をよろしくお願いします」

アンジェラはコルガーの肩を抱き、ギーヴを見上げた。男性陣は目を丸くした。

「え、ばあちゃんに行かないの？」

「え、君が行かなくてどうするの？」

老シスターは自嘲気味に目を伏せる。

「私は行けないわ。もうこの年だし、今さらだもの」

「何が年で、何が今さらなのさ？そんなの俺だつてそうだし、君を連れて行くつて、俺はあの時マキシムに約束したんだ！」

「ええ、でもね……私はマキシムに会うのが怖い。変わってしまった彼に会うことも、変わってしまった自分を彼の前にさらすことも、彼の築いた家庭を目の当たりにすることも怖い。彼の妻や子や孫が私のことをどう思うか、私が彼らをどう思うか、不安でたまらい。どうしても決心がつかない」

アンジェラはコルガーの肩に置いた手をぎゅっと握った。力を込め過ぎてしわだらけの手が一層白くなる。ギーヴはそれ以上追及しなかった。

「マキシムには、君は死んだと伝えるよ。その代りにコルガーを連れて来たと」

異常気象を引き起こした原因がマキシムにあるのなら、彼の怒りに触れるようなことは避けるべきだ。ギーヴとアンジェラが六十年もヨーロッパ大陸にとどまり続けたことにマキシムが怒っているのなら、アンジェラが死んだことにすれば少しは彼の怒りを鎮めることができるかもしれない。

ギーヴの理解を得て、アンジェラはほっと息をついた。

「ありがとう、猊下。さてと、二人とも朝食までもう一眠りするといいわ。コルガー、荷づくりは入念にするのよ。セーターを着て、靴下も厚手のものを履いて、懐炉も持っていきなさい、出かける前にちよつと暖炉で暖めるだけだから。手袋やマフラーも忘れずにね、冷えは女の敵ですもの」

アンジェラはコルガーの肩を抱いたまま礼拝堂の出口に向かって

歩き出す。今さらヒベルニアへ行けないと言うアンジェラのことも、それをあっさりと納得したギーヴのことも、コルガーには理解できなかった。

「ねえ、ばあちゃん、本当にいいの？」

少年のとまどいに気がつき、アンジェラは目を細めた。彼女はコルガーの髪にそっと頬ずりする。

「私の代わりにヒベルニアへ行ってちょうだい、コルガー。あなたはマキシムの血を引いているんだもの。あの人は、決して後ろを振り向かない人だった」

8・フライオーバー

アンジェラはコルガーの荷造りに手を出し口を出し、最終的にはそのほとんどを彼女がやることになった。コルガーは手際よく荷物を詰める曾祖母の傍らに座り、円筒形の革の鞆の中に防寒着や日用品が消えていく様を眺めていた。

「そういえば、私がなぜここに修道院を作ろうと思ったか、あなたに話したことなかったわね」

コルガーの部屋の窓は南向きだ。空は雲に覆われているものの、正午ともなれば淡い光が木の床やベッドを優しく照らす。

「うん、知らない」

出発は夜だ。暗闇に紛れてベルファストを脱出し、バンゴールという小さな港町に停泊している船を目指す。ギークは言った。別れを惜しむ時間を与えられたアンジェラとコルガーは、どちらからともなくできるだけ一緒に過ごしている。今生の別れではないにしろ、どちらかが街を出るということはこれまで一度もなかったのだ。

「私は嫁いでからたった一度だけ、家出したことがあったの。マキシムのそばにるのが辛くなってね。当時、私やマキシムやギークは狎下はフランスのオンフルール村の林檎修道院というところで暮らしていたのだけど、そこを一人で飛び出して、海を渡ってベルファストへ来たの。その頃、この町で大きな帆船を造っていてね、一目でいいから見てみたかったのよね」

「どうしてマキシムのそばにいるのが辛くなっちゃったの？嫌いに

なっただってこと？」

アンジェラは肩をすくめた。

「今ではこのとおり真っ白だけど、昔は私の髪もあなたみたいな茶色だったのよ。それがある朝、髪を梳いていたら白髪を一本見つけたの。怖くなったわ。マキシムは永遠に歳を取らないけれど、私はどんどん年老いていくんだって。そう思ったら居ても立っていられなくなってしまうたのよ。彼を愛してたから」

コルガーはぽかんとした表情で瞬きした。異性に寄せる愛情について、彼はまだ無理解だ。そういうものなのかと感心するばかりのコルガーにアンジェラは微笑む。

「ベルファストへやってきて、どこか教会で休ませてもらおうと街を歩いていたら、一人の修道女に出会ったの。彼女は私の母親くらいの年齢で、何も聞かずに私を自分の修道院へ連れて行くと、十数人の修道女たちを紹介してくれた。言葉は半分も通じなかったけれど、そこに暮らす修道女たちが皆、歳老いたクラシックだということとすぐに分かったわ。誰もが親切で、何かの縁だからいつまでもここにいるといいと言われ、私も半分その気になっていた。その修道院には後継者になるような若い修道女がいなかったから」

きゅうつと鞆の口の紐をアンジェラが引いた。円筒形の鞆の口が絞られ、紐が持ち手となった。試しに持ち上げて担いでみるとコルガーの背中にぴったり収まったが、少し紐が短いようだった。

「その一方で、私はマキシムが私を捜しに来てくれることを願っていた。捜し当てられるような場所じゃないことは分かっていたけれど、それでも彼が迎えに来てくれたら、私はすべてを諦めて彼と一

緒にいようと思ったのよ。最後の最後まで一緒にいようね」

アンジェラは鞆をコルガーから受け取り、紐の長さを調整する。
コルガーは机の上からスケッチブックを取り、これも入るかなと首を傾げる。

「そして、彼女たちと暮らし始めて二週間後、とうとう迎えが来たの」

「へえ、マキシムもここに来たことあるんだ」

コルガーはスケッチブックを鞆に押し込みながら不真面目に話を聞いていた。どうせ最後は迎えにきたマキシムと仲直りしてハッピーエンドに決まっている。

「いいえ。私を迎えに来たのはマキシムじゃなかったのよ」

少年の心中を察したのか、アンジェラはくすりと笑った。コルガーは目を瞬き、それから信じられないという顔をした。そうだ、ギーヴは六十年前にここへ来たことがあると言っていた。

「でも、あのギーヴ猯下がどうやって、ばあちゃんを見つけ出したの？」

ギーヴはお世辞にも勘が鋭いようには見えない。

「私も真っ先に聞いたわ。でも誤魔化された。マキシムが大慌てで私の実家へ旅立った後、何となく西のような気がしてアイルランドへやってきたんですって」

「それだけで修道院まで特定できないよ」

「ええ。だから私は、ギーヴ猯下には、まだまだ秘密があるんだと

思うのよ。私にさえ明かしてくれない秘密の力が」

アンジェラは楽しそうに笑い、コルガーに鞆を手渡した。今度は紐の長さも丁度良いようだ。

「あの人はいつでもマキシムの後ろにいた。修道院で暮らしている時も、教会へ反旗を翻した時も、いつもいつも自分はマキシムのオマケですって顔をしてた。前へ出ていく性格じゃなかったと言えばそれまでなのかもしれないけれど、今はそうじゃないような気がするの。彼は自分と兄を対のように見せ、そればかりか兄の方が優れているように見せていたけれど、本当は逆なのかもしれない。あの兄弟は、ギーヴ・バルトロメという異能の男と、ちょっと変わったその兄と言った方が正しいのかもしれないわ」

不老の男を「ちょっと変わった」と言ってしまうのは彼女だからだろう。

「ともかく、家出した私はギーヴ猊下に連れられて林檎修道院へ帰った。するとすぐに教会のクラシック弾圧が激しくなって、私たちは教会に抗議するべくエディンバラへ向けて行進を始めたの。そのどさくさに紛れてマキシムとはすぐに仲直りしたわ。彼の子を身ごもっていると分かったのもその頃で、今から思えば私の人生が一番輝いていた時だった。そして大行進が終わり、マキシムがヒベルニアへ旅立ち、ギーヴ猊下がエディンバラへ向かった後、私は怪我人や病人を収容できる安全な場所を探したの。その時、思い出したのがこの修道院だった。そして、この修道院を手放せずに私はまだここにいるというわけ」

ウイスキー修道院には後ろ盾となる有力者や資金源となる貴族のスポンサーがない。必要なものは自給自足し、院内で収穫した農

作物や手作りの酒やジャムや菓子を売り、教会の目を盗んで彼女は細々とクラシックの教えを守ってきたのだ。

「ついでに聞いてもいい？」

コルガーはふと思いついて訊ねた。

「なあに」

「マキシムが迎えに来てくれたら、最後の最後まで一緒にいようと思ったって、それって、ギーヴ猊下の場合も適用されたのかなあつて」

アンジェラは思いがけない質問に心底びっくりしたようだった。

彼女は何度か瞳を閉じ、今まで考えてもみなかったわ、と微笑んだ。

「でも、彼が迎えに来てくれた時、とてもとても嬉しかったのは本当よ」

彼女の唇からこぼれた声は驚くほど愛情に満ちていて、自分としてはいけない質問をしてしまったのではないかとコルガーは緊張した。曾祖母の本当の気持ちに気づいてしまうことは、誰に対してだか分らない後ろめたさがある。彼の心を読んだのか、アンジェラはうふふとおかしそうに笑った。

「それでも、私が愛していたのはマキシムだけよ」

昼寝から目覚めてギーヴが厨房に顔を出すと、夕飯の支度に取り

掛かっていた修道女たちが一斉に振り向いた。（見た目が）若くて顔の良い男が珍しいので、神々の花嫁たちも色めき立つのである。

「まあ、ギーヴ猊下、お目覚めですのね！」

「うん、おはよう。修道院の戒律を破って世話になっちゃって、悪いね」

これまでにウイスキー修道院に滞在を許された健康な男はギーヴ・バルトロメくらいであろう。女子修道院は日没とともに男子禁制となる。

「そのようなこと、エディンバラ名誉司教猊下のなさることですもの！」

「それもそうだよね」

可憐な野の花のような修道女たちに囲まれてギーヴが鼻の下を伸ばしていると、彼女たちの黄色い声を聞きつけたアンジェラが釘を刺しに来た。

「開き直ってどうするんです。本来なら、司教だろうと修道士だろうと、日没以降、老病人以外の殿方の滞在は許されていないんですよ」

「いいじゃない、俺は老人だよ。コルガーは？」

ギーヴがピクルスをつまみ食いしながら応じると、老シスターは薬草の入った籠をどんとテーブルに置いて笑った。

「一緒にお昼寝でもしましょうかって誘ったら、すっとなで逃げに行ったわ」

「そりゃね、もう十八歳でしょ、彼」

「……」

アンジェラは窓の外へ視線を転じ、暮れてゆく外の景色を一瞥した。

「ねえ、猊下、あなたは世間のことに疎い方だし、あの子もあなたより世慣れているとはいえ、長い旅に出るのは初めてのことだもの。道中くれぐれも気を付けてくださいね」

「分かってるよ。どうしたのさ」

「心配なのよ、あなたのこともあの子のことも」

アンジェラはそう言い残し、上の空の様子で厨房を出て行った。

「コルガーは多分、墓地にいますよ」

修道女たちから果樹園の奥に墓地があることを教えられ、ギーヴはコルガーを探しに行くことにした。火災のせいで焼け焦げた果樹園を抜けて墓地に着くと、案の定、彼は小さな募石の前に座り込んでいた。ギーヴがおもむろに近づいていくとコルガーはすぐに気が付き顔を上げた。彼の表情はひどく暗く、ギーヴはつられて悲しい気持ちになる。

「家族のお墓？」

「妹です」

短く答え、コルガーは募石を撫でた。覗きこむギーヴに、少年は皮肉っぽく言った。

「これ、彫ったのオレなんです。三月地震の直後は混乱してたから、適当に拾ってきた石を削って墓標にしたんですよ」

石工顔負けの技巧をこらした墓石を眺め、ギーヴは感心した。

「君って本当に芸術家なんだねえ」

マキシムもそうだった。そう思いながらギーヴが微笑んだ時、修道院の門の鐘が鳴った。庭で日直の修道女が「ズボンを出て行け」と唱え始める。男子禁制となる日没の合図だ。

「猊下、行きましょう」

二人が居住棟に戻ると、扉の前でアンジェラが待っていた。ギーヴは自分の荷物を取りに客室へ戻り、コルガーはアンジェラに荷物を背負わされ、防寒着を着こまされた。

「ばあちゃん、みんなに宜しく言っといてね」

「あの子たちも、あなたに宜しくって。これ」

アンジェラが手渡したのは弁当の包みだった。

コルガーは洗濯物を取り込んでいる修道女たちを見た。家族を失い、打ちひしがれていた彼に彼女たちはやすらぎと日常をくれた。彼女たちはどんなに口やかましく小言を言っても、コルガーが決して触れてほしくない話題については一言も口にしなかった。彼女たちはコルガーのことを静かに温かく、絶えず見守ってくれていた。

コルガーは無理やり笑顔を作り、大きくうなずいた。少しでも力を抜けば、涙がこぼれてしまいそうだった。

「コルガー」

「ばあちゃん」

コルガーはシスター・アンジェラに向き直り、彼女のしわだらけの両手を握った。老シスターは渾身の力で曾孫を抱擁した。

「身体を大事にきなさい。あなたは　女の子なんだから」

耳元で囁いたアンジェラに、コルガーは頷いた。

「それ、猊下には黙っててね」

「あら、どうして？」

「だってあの人、オレのことばあちゃんの若い頃にそっくりだって、うっとりしながら言うんだぜ。二人旅で変な気、起こされても困るし」

「……それもそうね」

何故かしみじみと頷いて笑い、アンジェラはコルガーの髪を撫でた。

「愛してるわ、エド。いつも、あなたの上に光が差しますように」

「……オレも祈ってるよ、いつも」

カンカンカン！しつこく鳴り響く鐘の音に、二人は体を離れた。そこへギーヴが戻ってくる。彼にしては機敏な動きだった。

「行こうか、コルガー」

「はい！」

シスター・アンジェラと別れのキスを交わし、コルガーは踵を返した。心は決まっている。揺るぎようがないほど決まっている。

駆け出したコルガーの背中に、修道女たちの惜別の言葉がぶつかったが振り返らなかった。待っていてくれる人がいるというのは良いものだ。走りながら勝気に笑い、彼は 彼女は思った。

「猊下、こつちから出ましょう」

修道院の広い庭を走りながら、二人は視線を交わした。前方には高い塀がそびえ、その向こうには深い堀がある。彼らはうなずきあって無邪気に笑い、同時に冬草を蹴った。二人とも、いい踏切だった。

そしてそのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。

1・民話学者の冒険（前書き）

第二章のはじまり。

おはなしはスコットランドを旅する民話学者と書籍商へ。

1・民話学者の冒険

ヨイク・アールトは初めて旅立つとき、父親にこう諭された。

「ヨイク、世の中には女の仕事というものがある。それを放棄しては世の中が成り立たないのだ。お前の好きな民話だってそうだ。妖精が妖精の仕事をしなくなったら困るだろう。誰が子供をさらうんだ」

ヨイクは鼻にもかけなかった。

「お父さん、人類の半数は女よ。女の仕事は彼らに任せて、私は私の、私にしかできない仕事をするわ。私ほどの民話学者は、人類の中にも二人とないんだから」

その後、彼女は自分の言ったことの正しさを証明した。一年かけて北欧諸国を周り、知られざる民間伝承を集めて本にまとめたのだ。『北欧伝承余話』は二カ国語に翻訳され、イギリスやフランスを中心にベストセラーになった。

だが、二度目の冒険に出るとき、彼女は婚約者にこう懇願された。

「君は女にしてはずいぶん自由に生きてきたんだ、もう充分だろう。お願いだから、危険な旅も難しい研究も今すぐ全部やめて、僕と結婚してほしい。君を必ず幸せにすると約束するから」

これにはさすがの才女も弱りはてた。彼は子供のころからの親友だったし、彼ならば約束通りヨイクを幸せにしてくれるだろうと思う。しかも二人とも結婚適齢期の十八歳である。だが、ヨイクは自

分が望むものが何か、よく分かつていた。彼もそうならいいのに。ヨイクは幼馴染みの青年を憐れむように見ると、言葉を選んでこう答えた。

「あなたが私を待てないというなら永遠にさよならよ。私にはまだ、やりたいことがたくさんあるの。見たいものも、知りたいことも、触りたいものも山のようにある。匂いをかいだり、肌で感じたり、自分の耳で聞いたり、そういうことをするために私は旅に出るのよ」

「僕が君を待てないならさよならだって？僕はいつだって君を待ってた！この前だって、半年で戻ると言って旅立った君を一年も待ち続けたよ！君が危ない目にあっているかもしれない、病気になっっているかもしれない、大怪我をしているかもしれない、もしかしたら命を落としたのかもしれない、僕はそんな不安を抱えて、来る日も来る日も君を待っていた！僕にもう一度、あの地獄のような生活をしろというのか！君には分からないかもしれないが、あの時、僕は狂い死んでしまいそうだったんだよ！」

婚約者の熱い眼差しを真正面から受け止め、ヨイクは初めて自分の心が揺れ動くのを感じた。それまでは罪悪感を覚えることはあっても出発を迷ったことなど一度もなかったというのに。いつも穏やかな彼がこんな風に感情を露にしたのも初めてのことだった。どきどきと高鳴る胸を拳で抑え、ヨイクは迷いを振り払った。

「心配かけたことは謝るわ、ごめんなさい。でも今旅に出なければ、きつと私は後悔する。あなたと幸せになっても後悔する。どんなに不幸になっただっていい、誰に馬鹿にされてもいい、私は私が生きる意味と喜びが欲しいわ。一生それを追い続けるわ、たとえ今あなたを失っても」

ヨイクは自分が震えているのではないかと思った。もしかしたら、自分は道を間違えようとしているのかもしれない。もしかしたら、この最後通牒を後々悔むことになるかもしれない。これは身勝手な自分をずっと待ち続けてくれた愛情深い彼へ恩を仇で返すような行為だ。己のあまりの傲慢さに改めて気がつき、ヨイクの良心は痛んだ。だが、腹から出した声はヨイク自身がびっくりするほど冷静だった。

「明朝、村を出るわ。今度の旅は特別な旅で、恐らく、私はエディンバラ教会に追われる身になる。それでも私の帰りを待っていてくれるか、私と別れるか。出港までにあなたの答えを聞かせて」

翌朝、彼は港へ来なかった。代りに、彼の友人が彼からの手紙を持って現れた。ヨイクはその手紙の封をまだ開けていない。

峻険な地形、過酷な自然。それがスコットランドの代名詞だ。町から町への移動は困難で、直線距離ではそう遠くない隣町へ、山を越え、川を渡り、谷や湖を迂回してようやくたどり着くということがザラにある。

だから、エディンバラ近郊の深い森の中を三日も歩き続け、へとへtoになってリラ城にたどり着いた人物がヤケクソになってしまっ
ていても仕方がない。降り積もった雪が辺り一面をほのかに白く照らす夕闇に、陽気なバイオリンの音が響き渡ったのはその時だ。

「ジャグリングをします」

のたまったのは背の高い赤毛の男だった。

「困ります」

答えたのは城の執事だ。

「始めます」

赤毛の男は仏頂面で言うと、持っていたバイオリンを地面に置いてジャグリングを始めた。密かな宴会芸として月に数回披露しているだけあって手慣れたものだ。

「突然困ります、お引き取りを！」

「まあまあそう言わず、見て下さい、あらよつと」

「え、衛兵！」

「まあまあまああ」

その押し問答はリラ城というロマンチックな城の正面入口で繰り広げられている。強引にジャグリングを始めた赤毛の男のもとへ衛兵が集まり、メイドが集まり、しまいには城主まで現れた。それを確認してから、立派な庭園の木のしげみで動き始めた人影があった。少女から大人に変わる年頃の女性だ。

俊敏で身軽な彼女はあつという間に北の別塔にたどり着く。見上げると最上階の窓の隙間から橙色の明かりが漏れている。彼女はその窓に向って、慣れた手つきで縄梯子の先端を放り投げる。縄を投げるのは子供のころから大得意だ。おかげで民話学者ヨイク・アールトが捕まえたトナカイの数は父より多い。彼女はノルウェー生まれのサーメ人で、自称純真無垢な十八歳の乙女だ。

「ちよろいもんだわ」

縄梯子がかかると、ヨイクはすいすいと梯子を登り、あつという間に塔の最上階にたどり着いた。木の窓をそつと開けて中を覗くと、暖かな暖炉のそばに座り込んだ少女が、眼を丸くしてヨイクを顧み
た。

「こんばんは」

ヨイクは寒さでこわばった頬をむりやり動かしにつこりと笑う。
悲鳴を上げられたりしては面倒だから、まずは警戒を解いてもらわ
なくては。窓枠に両肘をつき、民話学者は被っていた赤い帽子を取
った。

「びつくりさせてごめんなさいね。はじめまして、私はヨイク・ア
ールト。民話学者よ」

ヨイクが言うと、少女はその場に立ち上がった。彼女の歳は十四
五歳に見えた。痩せていて手足が長く、まるで少年のような体形だ
ったが、腰まで届く明るい茶色の髪や愛らしい目鼻立ちが彼女を女
性らしく見せており、足首が隠れる丈の白いドレスが妖精のような
雰囲気醸し出している。

「とりあえず中に入れてくれると嬉しいんだけど、どうかしら」

少女がこつくりと頷き、ヨイクはひょいと窓枠を飛び越えた。プ
ーツを履いた両足で軽やかに着地する。暖炉に燃えさかる炎のおか
げで室内は暖かった。部屋の中をぐるりと見渡すと、大きな寝台
や壁の絵画、マントルピースなどを始めとして、はつきり言ってギ
ーヴ・バルトロメの幽閉されていた部屋より格段に豪華である。ヨ
イクは複雑な心境で縄梯子を回収した。

「わたし、ヒリール・バルトロメ。ヒベルニア王マキシムの孫だよ」

言いながら、ヒリールは大きな茶色の瞳で珍しそうにヨイクを見つめた。ヨイクの服装は生まれ故郷の民族衣装だ。大きく波打つ長い金色の髪に青い瞳の民話学者は、藍色の膝丈ワンピースの上にトナカイ革の上着とブーツと鞆を身につけている。ワンピースの下に履いた細身のパンツや大小の布袋を付けた腰のベルトもトナカイ革だ。ワンピースには赤色の糸で独特の刺繍がほどこされていて、彼女が手に持っている耳まで覆う帽子もその赤い糸で頑丈に織られている。斜め掛けの小ぶりの鞆からは地図やメモの束が盛大にはみ出していて、これもやはりトナカイの皮でつくられたものだ。

「ヒリール……アイルランド神話の海神の名前ね。ギーヴ猊下から聞いてると思うけど、私は彼に頼まれて、あなたを迎えに来たの、すぐに支度して欲しいんだけど構わないかしら？」

少女は諸手をあげて歓声を上げた。

「あなたがギーヴおじいさまの言ってた人ね！良かった！これでヒベルニアへ帰れるんだ！」

嬉し泣きしそうな勢いの少女にヨイクは思わず笑ってしまった。

「話が早くて助かるわ。今、正面玄関で仲間が城の人たちの気を引いているから、今のうちに逃げましょう」

「わたし、あなたが来てくれるのをずっと待ってたの！すぐに支度する！荷作りもだいたいできてるから本当にすぐだよ！」

ヒリールが狭い部屋の中を行ったり来たりしながら支度するのを、

ヨイクはぼんやりと見ていた。本当はヒベルニアについて質問したり、自分や相方のことを話すべきなのだが、少女の発した「あなたをずっと待っていた」という言葉に、婚約者のことをつい思い出してしまったのだ。

ヨイクは斜め掛けの鞆を開け、婚約者からの手紙が入っていることを確かめてからヒリールをちらりと見た。ヒベルニア王の孫娘は興奮しているのか独り言を言いながら忙しく身支度しているが、その傍らにはまとまりそうにない私物がごろごろと転がっている。リラ城の主は彼女にずいぶん贈り物をしたようだ。もうしばらく彼女を待つことになるなら。ヨイクは婚約者からの手紙を鞆から取り出した。

『ヨイクへ。カームスより』

封筒に踊るその文字だけは、今まで何度も読み返してきた。ヨイクは思い切って封を切った。中からは二つ折にされた一枚の紙が現れる。

一枚。ヨイクは手を止めた。たった一枚の手紙で、彼は私との縁を切ったのだろうか。いや、まだ別れの手紙と決まったわけではない。だが、ヨイクの出発する朝、彼が港に現れなかったことを思い出すと、自然と手紙の内容は想像できた。

「ごめんなさい、お待たせ、ヨイク」

支度を終えたヒリールに声をかけられ、ヨイクは我に返った。読んでいない手紙を鞆にしまい込み、ヨイクは暖炉の火に灰をかけるのを手伝った。ヒリールはミルク色の毛皮のコートを羽織り、裏地に毛皮を張った温かそうなブーツを履いている。手には何も持って

いない。

「あら、荷物は？着替えとか、金目のものはあつて困らないわよ」
「うん、そういうの、全部身につけたから、平気」

ぽんぽんとミルク色のコートを叩き、ヒリールは無邪気に笑った。
なるほど、毛皮のコートの下に持ち物を着ているということか。そういえばコートのポケットから飛び出しているのはヘアブラシの柄のようだった。

ヨイクは窓に近づき、鞆にくくりつけていた長い縄をほどいて城壁の向こうの大木に投げた。石のついた縄の先端はぐるぐると太い枝に巻きつく。こちら側の先端を豪華な寝台の足に結ぶと、夜の闇の中に一本の縄がピンと張った。ヨイクは窓枠に立ち、へ字型の金属を取り出すと青い目を輝かせて言った。

「さて、忘れものはないわね？」

知らず知らずのうちにわくわくと心を躍らせている自分がいる。
これだから冒険はやめられないのだ。ヨイクは悪びれもせずになんと思つと、脳裏にちらつく婚約者の面影を丸めて暖炉に投げ込んだ。

すべてが終わるまで、彼のことは考えない、そうするわ。

「うん！」

緊張した面持ちで頷いたヒリールにヨイクは自分の赤い帽子を被せた。

「しっかり私に捕まって、行くわよ！」

張りつめた縄にへの字型の金属をかけ、皮手袋をした手でその両端をつかむと、ヨイクは思い切り窓枠を蹴った。ヨイクの身体に後ろから抱きつくヒリールが押し殺した悲鳴を上げる。

「ヨイクううう！」

二人の少女の体が闇に踊る。ヨイクの持つ金属が縄を滑り、それにぶら下がった二人は冷たい夜の空気を突っ切って緩やかに下降していく。ヒリールがヨイクの背中に顔を押し付けると、民話学者は心底楽しそうに白い歯を見せて笑った。

「目を開けないと後悔するわよ！」

雲の向こうに薄らと月が光る。その月明かりに、降り積もった雪や真っ白な深い森やリラ城が浮かび上がる。

ヨイクは思う。

夜の闇は優しい。民話や物語が語られるのは、こんな夜が、ふさわしい。

2・ロンドンの書籍商

リラ城は女性的な城と言われている。いくつかの灰色の円塔の上に三角形の薄青いトンがり屋根がのり、窓が小さく、壁が厚い、典型的な中世の城だ。この城は約三百年前、エディンバラ王の愛妾の城として建てられた。男女の愛憎と欲望と人血にまみれた数々のエピソードを持つ城だが、建物自体は小じんまりとして可愛らしい。

「ようし、うまくいったな」

その城壁の外側で、北の別塔から縄をつたって滑り降りて来る人影を満足げに眺める男がいた。神秘的な月光を背に、少女たちの影が太い枝のひとつにたどりつくと、彼はその大木に向って走り出した。

森の中は暗く、足元がおぼつかなかったが、明かりをつけるわけにはいかない。ユアン・リプトンは木の根や切り株を飛び越え、行く手を阻む小枝を掻き分けた。一面に積もる雪がほのかに明るく、そのおかげで怪我をすることはなさそうだ。

「ユアン、ここよ、ここ！」

聞き慣れた声が頭上から降ってきたところでユアンは足を止めた。木の上にヨイクの姿を見つけ、ユアンはほっと息をついた。ヨイクの傍らには髪の長い痩せた少女がいた。この派手な脱出劇のせいか青冷めた顔は、どこことなくギーヴ・バルトロメに似ている。

「救出作戦大成功よ！やっぱ私が救出役、ユアンがおとりで正解だったじゃない！」

ヨイクが腰に両手をあててふんぞり返ると、ユアンは深刻な顔をつくって応じる。

「威張ってないで降りて来い。足を滑らせても、あんたのその重さに耐えられる自信は……」

「無礼者」

振り下ろす拳とともにヨイクが枝から飛び降りた。鉄拳を受けたユアンは頭を抱えてその場にうずくまる。サーム人の女は強い。ヨイクは枝に残してきてしまったヒリールを見上げた。可憐な少女は、枝にしがみついたまま声も出せない様子だった。

「ヒリール、これは私の仲間のユアン・リプトン。ユアン、ヒベルニア王の孫娘のヒリール・バルトロメよ」
「よろしく。無事でよかった」

ユアンが微笑みを向けるとヒリールの頬がほんのりと朱に染まった。

「ヒリール、ちょっと高いけど思い切って飛んじゃうのが一番よ。雪が積もってるから怪我する心配もないわ」

無茶を言う。相手はお姫様だ。おてんば者の民話学者と同じというわけにはいかないだろう。躊躇するヒリールを見かねて、ユアンは木の幹に近づき両手を広げた。

「大丈夫だ、頭から落ちてこない限り受け止める」

「ヒリール、安心して。無礼で無愛想だけど、どさくさに紛れてお尻を触ったりしない程度には紳士な男よ」

「……誉めてるのか？」

ヒリールは大きく息を吸い込むと、眼をつぶって飛び降りた。落ちてくる細い身体をユアンが両腕で抱き止める。少女の両足を雪の上にそつと下ろし、ユアンは少女の表情をうかがった。ゆっくりと開かれたヒリールの目はとろんしていて夢見心地のようだ。

「あ、ありがとう、ユアン」

ギーヴ・バルトロメの血縁者なら少々ぼんやりしていても不思議はない。何故か顔をひきつらせているヨイクに一瞥をくれてからユアンはリラ城を見た。

「どういたしまして。さあ、さつさと逃げるぞ。まだ騒ぎにはなっていないようだが、君が消えたことがばれるのは時間の問題だ」

ヒリールがいなくなったことが分かったら、リラ城の城主は血眼になって彼女を探すだろう。ヒベルニアから流れ着き、エディンバラ教会に保護された彼女は、リラ城の城主にとって教会からの大事な預かりものののである。事態がエディンバラ教会に伝われば、教会は教会で追手を差し向けるはずだ。それまでに何とかエディンバラ近郊から逃れなければ。

三人は頷きあつてその場を離れた。

街道に出て馬車に乗るべく、三人は夜を徹して森の中を歩いた。ところが思った以上に雪が深く、雪道を歩くことに慣れないヒリー

ルが遅れたため、予定していた行程の半分ほどで夜が明けてしまった。ヨイクやユアンの疲労もピークに達しており、彼らは森の中で見つけた小屋で休むことにした。

自分が足手まといになったことを詫びるヒリールに、ヨイクは焦っても仕方がないわと言って笑った。追手から逃れるために少しでも距離を稼ぎたい気持ちは山々だが無理をしてヒリールが倒れてしまつては大変だと。

追手もまだここまでは来ないだろうと言って火をおこし、ユアンは暖炉で野菜スープを作り、凍ったパンを火のそばに並べて温めた。ヨイクはユアンの傍らに座り、口を出すでもなくうとうとまどろんでいる。

この二人はどういう関係なのだろう。ヒリールは小さなテーブルにつき、寄り添う二人を観察していたが、やがて視線はユアンだけに向いた。後方に撫でつけられた長めの髪は赤く、髪よりもワントーン暗い赤茶色の上着とパンツをまとい、黒いブーツを履いている。茶色の目は切れ長で、薄い唇は冷たい印象を与えるが、優しく響く彼の低い声は聴いていてとても気持ちがいい。こんなに素敵な人に会ったことはないわとヒリールは頬を染めた。

「さあ、召し上がれ。 ほら、あんたも起きろ」

ユアンは出来立てのスープの皿をヒリールに手渡し、暖炉の前で膝を抱えて居眠りするヨイクを揺さぶった。ヨイクは大きく伸びをしながらヒリールの向かいに腰を下ろし、手を合わせてからパンとスープを食べ始めた。椅子が二脚しかないため、ユアンは薪用の丸太に座った。

「神々の恵みに」

ヒリールは手を組んでつぶやくとスープを口に運んだ。それはヒリールにとって人生で何度目かの粗末なもてなしだった。最初に経験したのはスコットランド北部の漁村での食事だ。ヒベルニア島の沖で嵐に逢い、船から投げ出されて流れ着いたのがその村だった。数日後にエディンバラ教会が迎えに来てからは淑女としての待遇を受けたが、あの漁村で人々から親切にしてもらったときは忘れられないいい思い出だった。

「私がいなくなったこと、そろそろリラ城の人たちも気が付く頃かな」

毎朝、ヒリールを起こして身支度を手伝ってくれたのは侍女のローゼリットだった。真面目な彼女だ、ヒリールの不在を知ったらすぐに城主へ報告するだろう。もし彼らに捕まれば、エディンバラ教会はヒリールをもつと厳重に幽閉し、ヨイクとユアンは何らかの処罰を受けることになるに違いない。

「大丈夫よ。私たちが絶対に守ってあげる。あなたを必ずヒベルニアへ送っていくわ」

ヨイクが朗らかに大きく頷いたので、ヒリールの心は少しだけ軽くなった。リラ城の侍女たちは優しくだったが、こんな風に誰かと親しく話をするのは久しぶりだった。

「ありがとう」

「どういたしまして。ねえ、ヒリール。疲れてるところ本っ当に悪いんだけど、少しでも聞かせて欲しいの、ヒベルニアのこと」

ヒリールは温まった心が急速に冷えるのを感じた。

「 氣象兵器なんてないよ」

唇からこぼれ出たヒリールの言葉は氷のようだった。ヒリールはヨイクとユアンがどんな反応を示すかじっと窺った。ところが、ヨイクは喜びと興奮が極まったような目でヒリールの両肩をつかんだ。

「そんなのどうでもいいわ！私が知りたいのはヒベルニアに通じる海流のことか！一角獣湾のことか！人魚の入江のことか！火の山の洞窟のことか！花砂漠の嵐のことか！」

勢いに任せてまくしたてながら、ヨイクは鞆の中から筆記用具を取り出した。ヒリールは彼らを警戒していた自分が恥ずかしくなり、同時に嬉しくなって思わず腰を浮かした。

「な、なんでそんなにヒベルニアのことを知ってるの？今までに話した人たちの誰もそこまで知らなかったのに」

「私はヒベルニアの研究してるの。エディンバラ教会の付け焼刃的知識なんて、たかが知れてるでしょうね」

暖炉にかけていた鍋が沸騰した。ユアンが紅茶のポットに湯を注ぐ。

「ヒリール、あなた、船が難破してヒベルニアから流されて来たのよねえ。私は、ヒベルニアへ続く海流は一方通行だって聞いてるんだけど、違うの？」

「わたしも一方通行だって聞いてたよ。でも、わたしはこうしてスコットランドへ流れ着いたし、というわけか、ときどきヒベルニ

アの方角からの漂着物が海岸に打ち上げられることがあるって、わたしを助けてくれた漁村の人が言ってた。マキシムおじいさまなら、その理由を知っているかもしれない」

二人のやり取りに、ユアンが紅茶を入れる手を止めた。凶悪な顔でヨイクを睨んでいる。

「ちょっと待て、その民話学者」

ヨイクはうるさげにユアンを振り向いた。

「何よ、ユアン。あたしの学者生命がかかった大事な話をしてるときに」

「口を挟まずにいられるか！ヒベルニアへ続く海流が一方通行だなんて聞いてないぞ！」

「誰にも言っていないもん。そんなこと言ったら、誰もヒベルニアへ行きたがらないでしょ？」

「当然だ！あんたはともかく、おれはヒベルニアに骨を埋めるなんて御免だからな！」

「やあね、私だって嫌よ。まあ何とかなるでしょ、現にヒリールはこうしてヒベルニアからこっちへやって来てるわけだし」

偉そうにふんぞり返るヨイクとぷりぷりと怒るユアンを交互に見ながら、ヒリールは唇を尖らせた。

「ねえ、ヨイクとユアンは夫婦？」

「はあ？そんなわけないじゃない。名前だって違うでしょ、私はヨイク・アールト、彼はユアン・リプトン」

「じゃあ、恋人同士？」

「はあ？」

「違うの？」

「当然！第一、私には婚約者が……」

ヨイクは言いかけて口ごもり、それから忌々しげに頭を振った。すると彼女の波打つ金髪がふわふわと揺れ、ヒリールの興味はヨイクの髪形に向いた。ヒリールの髪は真っ直ぐなので、ヨイクのようにウェーブのかかった髪が少し羨ましかった。金色というのも魅力的だ。祖父マキシムが金髪だからヒリールがそれを受け継いでいてもおかしくないのだが、残念ながら彼女の髪は明るい茶色である。

「おれたちはビジネスパートナーだ」

嘆息と共に言ったのはユアンだった。ヒリールは聞き慣れない言葉に首をかしげた。

「ビジネスパートナー？」

「彼女は民話学者で、おれは書籍商、つまり本屋だ。おれは彼女の旅と研究に出資、つまり金を出していて、彼女の本をロンドンで印刷したり、世界中の書店に売りさばいたりして利益を得ている。そして利益の一部で、彼女の次の旅と研究に出資する、その繰り返しだな」

「そういうこと。私はお金の計算とか、製本とか、書店との交渉とかできないからね。面倒なことは全部ユアンにやってもらってるの」

ヨイクとユアンを交互に眺め、ヒリールは腑に落ちないものを感じた。彼らは合理的な協力者というだけではないような気がするのだ。

ヒリールがうっかり欠伸をすると、ヨイクが立ち上がって小屋の

隅に毛布を敷いてくれた。彼女に促されるまま眠りに落ちていく途中で、ヒリールは久しぶりにいい夢が見られそうだと思った。

2・ロンドンの書籍商（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます！

次回の更新は11月20日（日）です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4345y/>

ヒベルニアの極光

2011年11月20日00時41分発行